

竹ノ花遺跡

塩尻市北熊井南地区土地改良事業
共同施行発掘調査報告書

1988

塩尻市教育委員会

竹ノ花遺跡

塩尻市北熊井南地区土地改良事業
共同施行発掘調査報告書

1988

塩尻市教育委員会

序

竹ノ花遺跡は北熊井城跡の尾根続きにあり、市内一円を展望できるとても恵まれた環境にあります。付近は以前よりよく知られた遺物採集地でありましたが、折りしも昨年度、東山山麓線が当地に掛かったことを機に当市教育委員会により発掘調査が行なわれ、住居址が発見されるなど集落跡の一端が露呈されました。この度、東山山麓線の関連事業として行なわれる北熊井南地区土地改良事業がこの地区に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から市教育委員会に緊急発掘調査が委託されたものであります。

発掘調査は6月末から8月初旬という前半は梅雨期、後半は酷暑炎天下の元という極めて過酷な条件下において実施されましたが、おかげさまで作業も順調に進み、その結果、数多くの遺構・遺物が確認され、今後該期の研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供することになりました。

終わりにあたり本調査が無事完了するについては、北熊井南地区土地改良事業共同施行代表者、南沢繁富氏をはじめ役員の方々、並びに地元の方々の深い御理解と御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和63年2月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

例　　言

1. 本書は塙尻市北熊井南地区土地改良事業共同施行に伴う、竹ノ花遺跡発掘調査報告書である。なお同遺跡は昨年度も東山山麓線整備事業関連で発掘調査が実施され、『1987 今泉・竹ノ花遺跡、塙尻市教育委員会』が発行されている。
2. 調査経費については、国庫・県費補助金および市負担金による。
3. 発掘調査は昭和62年6月23日から同8月15日まで行なった。
4. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和62年8月から昭和63年2月にかけて行なった。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース：鳥羽

遺物…整理、実測、拓本、トレース：小林、市川、腰原、古既、中村、山本。

図版組み…鳥羽、小林、腰原、古既、中村、山本。

写真…鳥羽、伊東。

5. 本書の執筆は各調査員、調査補助員が分担して行ない、文責は文末に記した。
6. 本書の編集は鳥羽が行なった。
7. 調査にあたり塙尻市北熊井南地区土地改良事業共同施行代表者南沢繁富氏ならびに関係役員の各氏、および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。
8. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序

例 言

第I章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体概	2
第3節 調査日誌	2
第4節 遺跡の状況と面積	5

第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境	6
第2節 周辺遺跡	8

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要	10
第2節 発掘区の設定	10

第IV章 遺構

第1節 I 地区	15
1) ロームマウンド	15
2) 小豊穴	21
3) 溝	25

第2節 II 地区	25
1) 北熊井城闇連遺構	25

第V章 遺物

第VI章 北熊井城跡について

第VII章 結語

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

- 61年12月23日 昭和62年度文化財関係補助事業計画について（提出）
62年4月3日 昭和62年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
5月11日 昭和62年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
6月19日 埋蔵文化財包蔵地竹ノ花遺跡発掘調査について（依頼）
6月23日 市耕地林務課、市教育委員会、地権者による現地立合、クイ打ち
6月24日 昭和62年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
6月25日 埋蔵文化財包蔵地竹ノ花遺跡発掘調査の受託について（回答）
〃 埋蔵文化財包蔵地竹ノ花遺跡の発掘調査について（通知）
6月30日 昭和62年度文化財保護事業県補助金の内示について（通知）
7月6日 昭和62年度文化財保護事業県補助金交付申請書について（提出）
8月5日 昭和62年度文化財保護事業県補助金の交付決定について（通知）
8月19日 竹ノ花遺跡発掘調査終了届について（通知）
〃 竹ノ花遺跡埋蔵文化財の収得について（届）
11月6日 竹ノ花遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2. 遺跡名 竹ノ花遺跡
4. 発掘調査の目的及び概要 開発事業塩尻市北糸井南地区土地改良事業共同施行に先立ち600m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和62年8月31日までに終了する。調査報告書は昭和63年3月25日までに刊行するものとする。
5. 調査の作業日数 発掘作業23日 整備作業23日 合計46日
6. 調査に要する費用 発掘調査総額4,000,000円 文化財農家負担軽減額(70%) - 2,800,000円 計1,200,000円
7. 調査報告書作成部数 300部

第2節 調査体制

団長	小松 優一 (塙尻市教育長)
担当者	鳥羽 嘉彦 (長野県考古学会員、市教委)
調査員	小林 康男 (日本考古学協会員、市教委) 伊東 直登 (長野県考古学会員、市教委) 市川二三夫 (長野県考古学会員)
調査補助員	藤原典明、籠塙 守。
参加者	赤津道子、池田貴江子、太田 和、小沢甲子郎、小松重久、小松鈴子、小松幸美、 小松義丸、小松静子、桜井洋子、清水年男、高橋タケ子、高橋島僚、高橋河や了、 中野やすみ、藤松謙一、松下おもと、黒沢広光、山口伸司、青木千秋、志水安秋、 芦沢元子、中垣内秋人、上条官雄、齊藤晴敬、伊東逸子、吉江正男、笠原信英、田 中源三郎、伊藤智彦、依々木由起子、小松幸代、古畠馨子、山本敬子、中村ふき子。
事務局	塙尻市教育長 小松優一 市教委総合文化センター所長 清水良次 〃 文化教養担当課長 横山哲宣 〃 文化教養担当副主幹 三澤 深 〃 平出遺跡考古博物館学芸員 小林康男 〃 文化教養担当主事 鳥羽嘉彦 〃 文化教養担当主事 伊東直登
協力者	塙尻市北熊井南地区土地改良事業共同施行代表者 南沢繁富 〃 亂代表者・地権者 小松市之助 塙尻市北熊井南地区土地改良事業共同施行代表者 錦宮義典 〃 副代表者 小松光広 地権者 錦宮半次郎

第3節 調査日誌

昭和62年6月23日(火) 塙市耕地林蔭課、地権者との三者による現地立合により調査の打ち合わせを行い、調査区の境界杭を打つ。あわせて表土の堆積状態を調べるために数ヶ所に試掘坑を入れる。

6月29日(月) 小雨 バックホー、ブルトーザーにてI地区の表土除去。調査区中央に南北方

に向かって走る浅谷帯を発見する。

7月1日(水)晴 テントおよび発掘器材を現地へ搬入。

7月2日(木)晴 本日から本格的作業開始。参加者の受付終了後、挨拶と日程説明。テント設営後、I地区西側より助審により検出作業開始。I地区に5m四方のグリッドを設営する。A-G-1~14。

7月3日(金)雨 雨天中止。

7月4日(土)晴 検出作業。中央に南北方向の、そして北側に東西方向の溝(幅30~40cm)を発見する。浅谷の西側の尾根部にピットを数基検出。縄文土器片、打製石斧2点出土。

7月5日(日)定休日

7月6日(月)曇のち雨 検出作業。北西隅は谷となり北側へ急に落ち込む。南側道沿いに縄文前期、打製石斧、尖頭状石器多数散在。昼休み降雨となつたため作業を中止にする。

7月7日(火)晴 東側で2回目の検出作業にはいる。おひただしい砾層のため作業がはかどらない。中央の浅谷に5本のトレンチ(1~5トレンチ)を直角方向に入れる。今日よりII地区(北熊井城跡北斜面)に分かれ、作業にはいる。北斜面の草刈りを行う。

7月8日(水)晴 I地区、浅谷域のトレンチ掘り下げ。尾根部の細い溝の掘り下げ。II地区では草刈りおよび斜面に3本のトレンチを斜面方向に設営。

7月9日(木)晴 I地区、トレンチおよび溝掘り下げ。南側の2本のトレンチ内にロームマウンドらしいものを発見する。II地区、A~Cトレンチ掘り下げ。一番上端で約60cmの深さでローム面露呈。黒曜石塊および打製石斧2点出土。

7月10日(金)晴 I地区、2・3トレンチセクション図測図。1・4・5トレンチ掘り下げ。ピット群掘り下げ。II地区、A~Cトレンチ掘り下げ。斜面上方で約60cm、下方で100cmの深さでローム面露呈。

7月11日(土)曇 I地区、ピットおよび溝のセクション図測図。5トレンチおよびピット掘り下げ。II地区、A~Cトレンチ掘り下げ。Bトレンチほぼローム面検出。空堀らしきものなし。

7月12日(日)定休日

7月13日(月)晴時々にわか雨 I地区、4・5トレンチおよびピット群掘り下げ。Aトレンチセクション図測図。II地区、A~Dトレンチ掘り下げ。Bトレンチ完掘。Dトレンチ掘り下げ開始。

7月14日(火)曇 I地区 ピット群セクション図測図。5トレンチ掘り下げ。浅谷域のトレンチ外の黒色帶を掘り下げ開始。II地区、A・B・C・Eトレンチ掘り下げ。Cトレンチ完掘。

7月15日(水)小雨のち雨 I地区、浅谷域掘り下げ。II地区、A・D・Eトレンチ掘り下げ。Eトレンチ南側の河床跡らしきところから縄文土器片、打製石斧出土。昼、降雨となつたため作業中止。

7月16日(木)雨 雨天中止。

7月17日(金)晴 I地区、ピット掘り下げ。P-21の集石ピットの実測、写真撮り。4トレン

チセクション図測図。浅谷域掘り下げ。II地区、A・D・Eトレントラシング掘り下げ。Aトレントラシング上部および中間の土手部分を横方向へ拡張する。

7月18日（土）雨 雨天中止。

7月19日（日）定休日

7月20日（月）雨 雨天中止。

7月21日（火）晴 I地区、小豎穴、溝の写真撮り。浅谷域掘り下げ。II地区、Aトレントラシング拡張部およびD・Eトレントラシング掘り下げ。Eトレントラシングより暗渠水路検出。B・Cトレントラシング測図。

7月22日（水）晴 5号ロームマウンドセクション図測図。浅谷域掘り下げ。II地区、D・Eトレントラシング完掘。Aトレントラシング拡張部掘り下げ。

7月23日（木）晴 昨日で終了したD・Eトレントラシングの半数を中央帶へ入れ掘り下げ。下位の方は遺物少ない。II地区、Aトレントラシング拡張部掘り下げ。中腹の土堤は途中で途切れる。頂上部を僅か南へ拡張し、溝の性格を追う。

7月24日（金）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。出土遺物ほとんどなし。II地区、頂上および中腹拡張区掘り下げ。中腹のローム質土壁の平面図測図。

7月25日（土）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。II地区、中腹の土堤掘り下げ。完掘。頂上拡張部の掘り下げ。

7月26日（日）定休日

7月27日（月）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。II地区、頂上の溝を精査。斜面と直交する方向に上部巾120cm、底部巾50cm、深さ50cmでやや西側へ傾斜している。

7月28日（火）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。II地区、頂上拡張区検出。Aトレントラシング測図。

7月29日（水）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。ロームマウンド平面図測図。II地区、拡張区完掘。

7月30日（木）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。II地区、空堀精査。空堀の平面図、セクション図測図。

7月31日（金）曇時々小雨 I地区、浅谷域掘り下げ。II地区、全体図測図。A・Bトレントラシング掘削部を横へ拡張。

8月1日（土）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。1号・2号ロームマウンド平面図測図。3号ロームマウンド上面測図。II地区、A・Bトレントラシング拡張区掘り下げ。全体図測図。

8月2日（日）定休日

8月3日（月）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。溝・平面図測図。II地区、A・Bトレントラシング掘り下げ。全体図のレベル入れ。

8月4日（火）晴 I地区、浅谷域掘り下げ。全体図測図。II地区、Aトレントラシング拡張。空堀の埋め戻し。

8月5日(水) 備 I地区、4・5号ロームマウンドセクション調査、写真撮り。全休図完成。全体写真撮り。II地区、頂上の空堀部埋め戻し。器材片付け、テント撤収。本日をもって現場における発掘調査を終了する。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
竹ノ花	塩尻市大字片丘 北熊井	畠地	集落跡	21,000m ²	6,500m ²	600m ²	2,140m ²	2,000,000円

第1表 発掘調査経過表

月 遺跡名	6	7	8	9~2	主な遺構	主な遺物
	竹ノ花	発掘	遺物整理 岡面作成 原稿執筆			
					ロームマウンド 5 小豊穴 27 溝 1	縄文時代早期 土器 縄文時代中期 土器、石器 弥生時代中期 土器 近世遺物

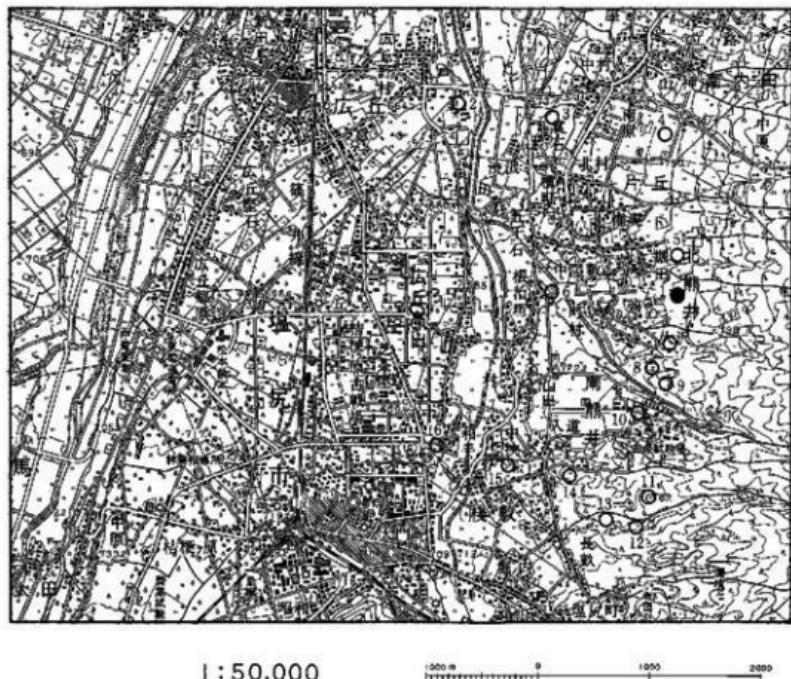
(事務局)

第II章 遺跡周辺の環境

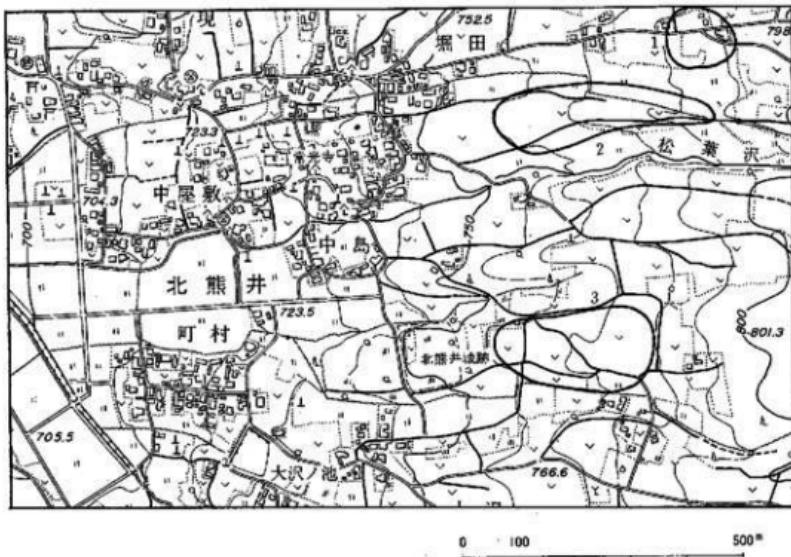
第1節 自然環境

片丘地区は塩尻市の東側を流れる田川から高ボッチ山麓までを地区域とし、その大部分が西へ傾斜する丘陵域にある。

この丘陵は山麓斜面に沿って発達する崖錐性のもので、塩尻市街地の東方、小坂田付近から松本市の寿付近まで、2 km 前後の幅を維持しながら約10km にわたって延びているものである。平均勾配は約6°と急傾斜をなしているために、山麓から流下する群小の河川による開析は著しい。



第1図 竹ノ花遺跡位置図



1. 今泉 2. 中尾敷 3. 竹ノ花

第2図 遺跡範囲図

これらはすべて丘陵直下を北流する山川には直角に注ぎ込んでいる。

丘陵上の遺跡は、これらの諸河川により深く開析された台地の縁辺部もしくは尾根上の台地上に展開しており、眼下に北アルプスの峻峰の連なりと松本平が一望される好条件の立地環境にあるといえよう。

崖側性の礫層は、フォッサ・マグナ西縁の断層崖に伴うもので、この付近の基盤である吉牛層および洪積世前期の塩張累層を不整合に被覆し、層厚は約30m、盆地へ向かって緩傾斜をなしている。片丘礫層、赤城山礫層といった名称で呼ばれるもので、一般に両者は岩相的に類似しているために判別は難しく一括されている。角礫～亜角礫層で淘汰が悪く、基質は火山灰質の褐色シルトである。礫種は吉牛層起源の硬砂岩、粘板岩、珪質頁岩、新第三系の砂岩、凝灰岩、貫入岩体の閃綠岩類、第四系塩張累層の安山岩など多様に富んでいる。

礫層の上部には火山灰質のロームが3～4mの層厚で被覆しているが、これはさらに2層に細分される。下部は黄灰色の軽石質ロームであり、御岳山起源の小坂日ロームといわれているものである。これに対し上部はシルト質の鮮明な褐色を呈しており、乗鞍岳起源とされている波田ロームである。両者は共に風成で塊状を呈しており、地域による著しい層厚の変化はない。

今回調査された竹ノ花遺跡の立地する台地も松葉沢川と南久保の間に北側と南側を深く開析された複合扇状地であり、中央を東西に走る大きな崖地帯が台地の西先端までを二つに分けている。崖地帯の北側台地上が一本杉遺跡、南側台地上が竹ノ花遺跡となり、竹ノ花遺跡の西側に城遺跡、更に西側の尾根先端部分には中世の北熊城跡が郭跡を現在に残している。

竹ノ花遺跡の立地する丘陵上の尾根部は、地表景観だけによれば一続きのものであるが、調査区の黒褐色表土を剥いだところ、中央域には南北方向の浅谷がローム面にみられた。当初は北熊井城に関わる何らかの施設かと思われたが、時代的に先行するロームマウンドが数基検出されたため明らかにそれ以前のものであることが判明した。底部付近に河床跡を示す砂礫などがみられながら、おそらく遺跡の時代もしくはそれ以前に地表流氷が浅谷方向にあったものと推察される。調査区が遺跡の中心ではなかったため、この浅谷域が集落に果した役割を推し測ることはできないが、付近の地表景観について言えば当時は現在とかなり違う様相を示していたことを、この浅谷の存在は物語っている。調査区の標高はI地区で770m、II地区では752~760mである。

(鳥羽嘉彦)

第2節 周辺遺跡

本遺跡の立地する片丘丘陵には高ボッチ山麓から流下する群小の河川により形成された複合扇状地や舌状台地が発達しており、松本平でも有数の遺跡稠密地帯となっている。以下これらの遺跡について概観してみたい。

先土器時代では小丸山、山の神、向陽台で遺物が発見されている。小丸山では全長13.7cmの尖頭器が出土し、山の神では中央道長野線建設に伴う発掘調査によってローム層中から黒曜石片が集中して出土する箇所（ブロック）が、また向陽台では塙尻20号ハイバス建設に伴う調査によりナイフ形石器が出土している。従来、松本平ではこのような丘陵上に該期の遺跡はほとんど見られなかっただが、近年上記の成果を始め類似地形上の数例の発見があり、遺跡の立地条件に新知見を与えつつある。

縄文時代早期には竈神平、祖原、山の神、堂の前、福沢、向陽台などの諸遺跡があり、向陽台、竈神平、堂の前では住居址が検出されている。とりわけ向陽台では押型文期の住居址4軒、集石炉4基が、また堂の前では早期末の住居址が6軒それぞれ発見され、この時期の極めて貴重な集落址の資料を提供することとなった。

前期では北熊井地区だけでも境沢、男屋敷、富士塚、中原、祖原、立石、竹ノ花、女夫山ノ神、大林と9ヶ所の遺跡が確認されており、発掘例でも神ノ木、有尾、諸磯期の住居址が検出された男屋敷の他、女夫山ノ神、竹ノ花でそれぞれ住居址が検出されている。

中期は狐塚、沢沢、境沢、竹原、男屋敷、富士塚、源十窪、一本杉、長者清水、齊沢、定原、立石、大沢、女夫山ノ神、菖蒲沢、牛亮沢、城、小丸山、二本木、君石、上木戸、山ノ神など枚挙にいとまがないほど多くの遺跡がある。この中期は遺跡の激増とともに大集落址の発達が著し

く、代表的なものに須原、小丸山がある。須原は中期のほぼ全期にわたる計147軒の住居址が跡40mの中央広場を囲んで円環状に検出され、典型的な環状集落の様相を示した。また小丸山でもやはり状況を有する小野穴を中心広場に配し、これを中心に14軒の住居址が取り巻いていた。

縄文後期にはいると、竜神、上木戸、舞里敷など僅かな遺跡が知られる程度で遺跡は激減する。住居の発見はなく少量遺物が採集されているにすぎない。このような状況は次の晩期に入っても同様で桜林、京方などで遺物の出土が認められる程度となる。

弥生時代では、生活域が山麓から田川流域へ降りていく。向陽台、上木戸では後期のまとまつた集落址が発見されたほか、向陽台、大原では方形周溝墓が検出され、また浜沢、花見、中原、横町、狐塚、久保在家などで遺物が採取されている。今回出土した弥生中期については、昨年度、南隣りの中原でも出土しており相互の関連性が伺われる。

(鳥羽嘉彦)



第3図 調査地区図

第Ⅲ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

今回発掘調査の対象となった竹ノ花遺跡は、塙尻市片丘北熊井地籍にあり、中世の北熊井城跡が立地する丘陵の後背尾根続きに展開する。

昭和61年度、東山庄麓線建設事業が当地にかかったことから緊急発掘調査が実施され、縄文時代前期黒浜期の住居址1軒をはじめ、ロームマウンド、小堅穴、墓址と縄文時代後期の遺物が出土している（1987 今良、竹ノ花遺跡、塙尻市教育委員会）。

今回の調査は同事業に関連する土地改良事業に伴う緊急発掘調査であり、山麓線と北熊井城跡との間に2ヶ所の調査区を設けた。調査总面积は2,140m²に及ぶ。

調査の結果、遺構はロームマウンド5基、小堅穴27基、墓1基の他、北熊井城に関連する遺構が確認され、遺物は縄文時代早期・中期、弥生時代中期・近世の土器、石器が出土している。

検出された遺構については昨年度の成果と同様の傾向がみられるが、住居址が確認されなかつたことから調査区（工事区）が竹ノ花集落の外縁部にあたるものと推察される。

城跡関連遺構は城跡の北側斜面の上段近くに横方向の空塹が検出され、形態からおそらく濠というよりむしろ馬出の性格を有するものと考えられる。

土器は縄文早期の格縄体压痕文、前期末～中期初頭土器、弥生中期初頭土器が出土し、また石器としてはやはり同時期のものと考えられる石鎌、打製石斧、石匙、不定形石器、横刃形石器、磨石、特殊磨石が出土している。

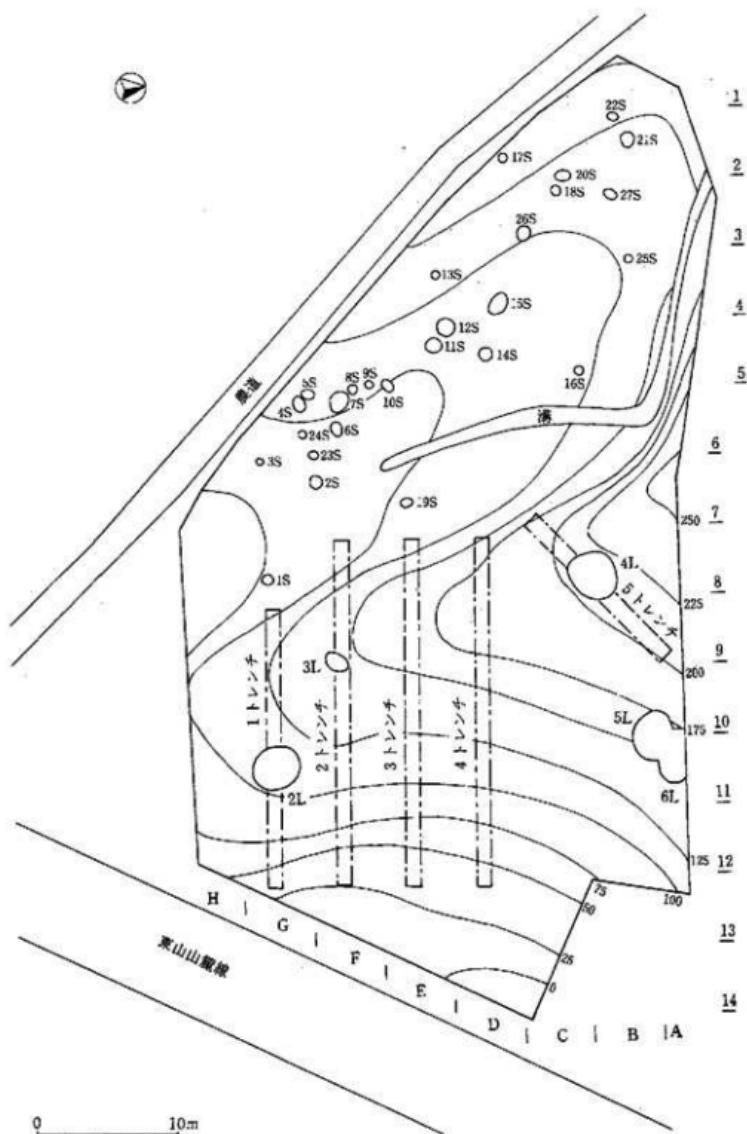
以上、概略を記したが詳細については他章を参照してもらいたい。

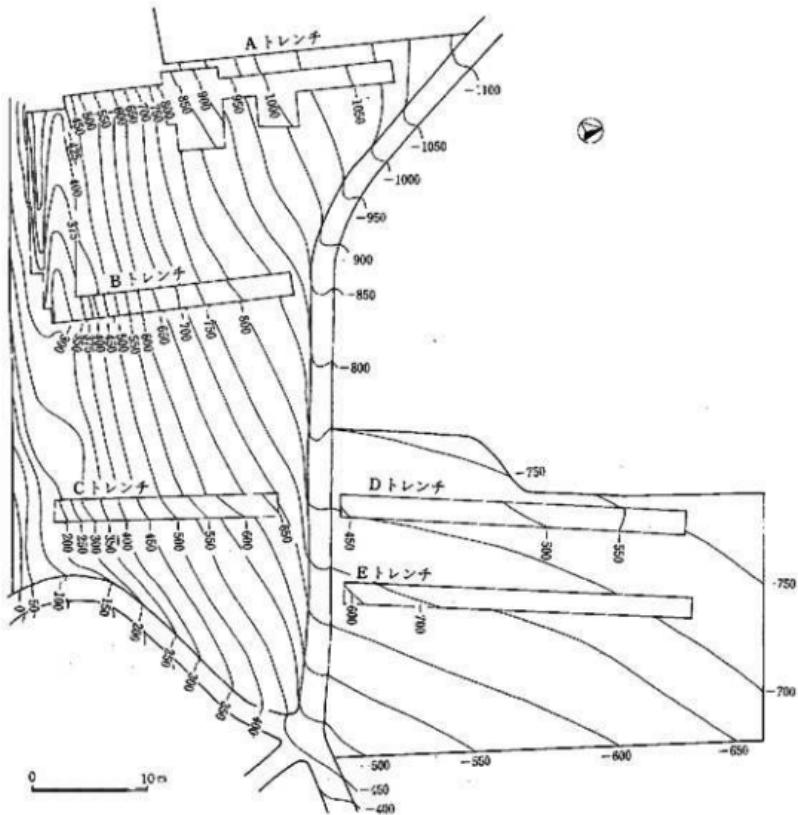
第2節 発掘区の設定

対象となる土地改良事業の範囲は本遺跡の立地する丘陵（先端に北熊井城跡が構築されている尾根）では北斜面のみが対象となり、付近の環境および昨年度の山麓線関連で実施された発掘調査により確認された遺跡の中心地である丘陵の陵線部は除外地となつた。そこで昨年度、住居址が検出された箇所に最も近い南側の畑を今回の調査対象区（I地区）とした。また本遺跡の西側にあたり、北熊井城跡の北側空堀が所在する可能性がある北向斜面および直下の谷間の畑にも調査区（II地区）を設けた。従って今回の調査は竹ノ花遺跡の一部を調査することが主目的であるが、併せてその所在が明確でない城遺跡や城跡の付属施設の一端をえることも目的としたものである。

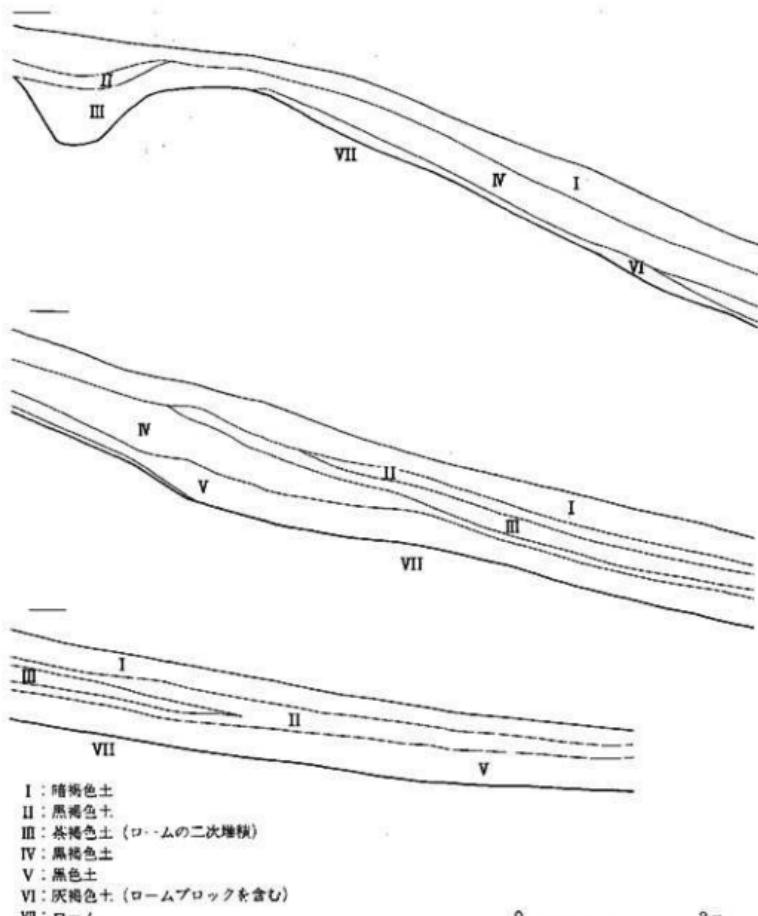
発掘面積はI地区で1,800m²、II地区で340m²を測り、总面积は2,140m²である。

I地区ではバックホーとブルトーザーによる表土除去を行なったのちグリッドを設定した。グ





第5図 II地区全体図



第6図 II地区土層図 (Bトレンチ西壁断面図),
I地区上層についてはロームマウンド図版参照

リッドは5m間隔で北から南へ向かってA～H、西から東へ向かって1～14を設定した。また調査過程で中央域の浅谷の性格を伺うために浅谷に直交する方向で幅1mの1～5トレンチを設定した。

II地区では北向き斜面に西側から幅2mのA～Cトレンチを、また下の淵にD・Eトレンチを設定し、各トレンチ調査後、斜面上方のテラス状段地形を確認するためにAトレンチとBトレンチをつなぐ拡張区を設けた。

土層については次のような基本層存をとる。すなわちI地区ではロームの上に薄く暗黒褐色上の表土が被覆しており、浅谷域では両者の間に黒色土を介在している。またII地区ではロームの上に暗褐色土が乗り、黒褐色表土がそれを被覆している。急斜面であるA～Cトレンチでは土層に押し出し現象がみられた。

(鳥羽嘉彦)

第Ⅳ章 遺構

第1節 I 地区

1) ロームマウンド

第2号ロームマウンド

竹ノ花遺跡で検出されたロームマウンドについては昭和61年度に片丘山麓線開通で発掘調査が行なわれた隣接地で第1号ロームマウンドが確認されているため、今回、確認されたものについては第2号から番号を付けるものとする。なお、第1号ロームマウンドの規模については一覧表に掲載したので参照されたい。

第2号ロームマウンドは調査区の南東隅、1トレンチ中央より検出された。トレンチは調査区中央に南北に走る黒色帯を調べるために設定したものであるが、トレンチ設定期にすでに黄褐色ロームの存在はあった。しかしロームを取り囲む黒褐色土が表土として広がっていたため、ロームマウンド特有のドーナツ形状を呈していなかった。そこでトレンチを掘り下げ、断面にロームマウンドの形状が認められた時点で初めて確認したものである。トレンチでセクションを固化したのち、両側へ拡張し全掘した。

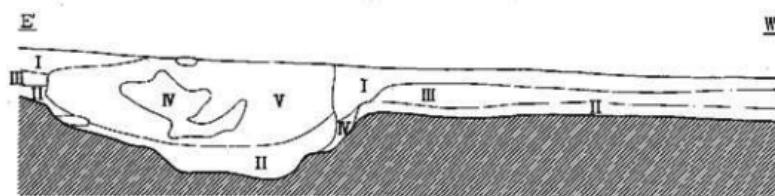
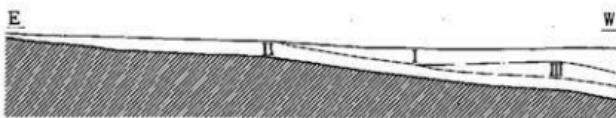
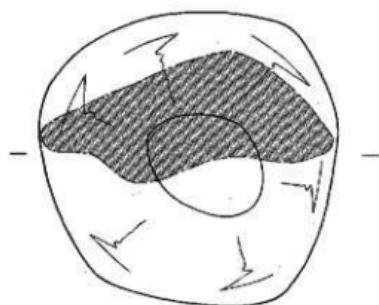
プランは南北320cm、東西310cmのはば円形を呈し、やや播鉢状の断面を有する。壁は2段に落ち込み、底面も起伏が多い。土層は褐色ローム塊を包むように黒色土が底部に堆積しており、その上に乗る表土の黒褐色土がロームを囲んでいる。マウンドはローム均質ではなく、セクションに見られるようにやや砂礫質の黒褐色土を取り囲んでいる。マウンドはN-76°-Wの方向に長く伸びており、下部擴の中心よりやや南寄りにある。

第3号ロームマウンド

2トレンチ内の中央やや西寄りに検出される。表土除去の際、黒褐色土の中に小規模なロームの広がりが発見され、ロームマウンドの可能性が伺われた。トレンチをちょうどロームにかかるように設定期に掘り下げたところ、キノコ状の断面を呈するローム質のマウンドが羽略に確認されたため、第3号ロームマウンドとした。

下擴部のプランは橢円形を呈し、南北186cm、東西128cmと発見されたロームマウンドの中では最も小型なものである。マウンド部がかなり上層から発達しているのに対し、下擴部は僅かな凹みを有しているにすぎず、深さは最も深い所で40cmを測るのみである。マウンド部は褐色のローム塊からなり、黒色土と黒褐色土によって包まれている。下擴部では最も下位の暗褐色土が欠陥し、黒色土だけがマウンド部との間に介在している。マウンド部は下擴部に対しやや南側に寄っており、方向も一致してはいない。

▽



E

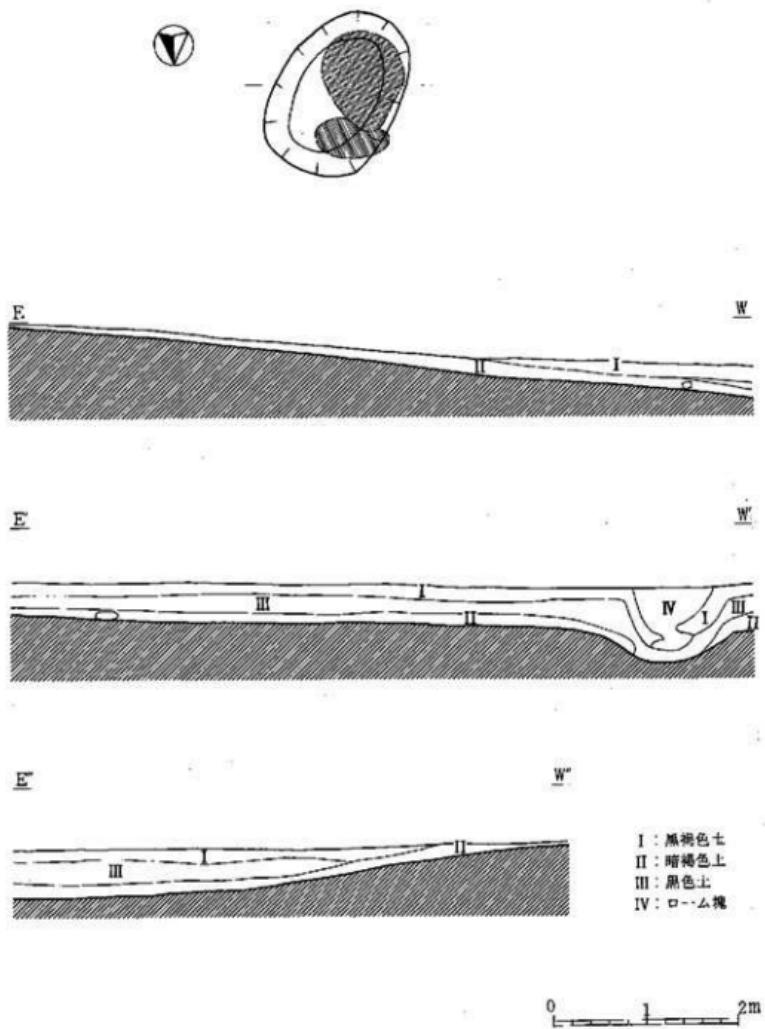
W



- I : 黒褐色土
II : 黒色土
III : 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
IV : 黑褐色土 (V層と同じくやや砂質、
小礫 max1.5cm を含む)
V : ローム (地山と同じ)

0 1 2m

第7図 第2号ロームマウンド 1トレンチ南壁断面図



第8図 第3号ロームマウンド 2トレンチ南壁断面図

第4号ロームマウンド

調査区中央域に南北に走る浅谷に設定した5本のトレンチのうち、最も北側の5トレンチ内に検出された。前2者と異なり表土除去の際には発見されず、偶然場所を設定したトレンチを探り下げていったところ、セクションにより確認された。セクション開削図のうち、周囲の表土を下げ、マウンド部の平面形を露呈させた。

下横部のプランはやや東西南方向に伸びる不整規円形を呈し、長径326cm、短径326cmと調査区の中では最も大型のロームマウンドである。壁は緩やかな斜面を持ち、底面は2つの丸底が並んでいる。マウンド部は中央のローム質礫層とそれを取り囲む茶褐色土からなり、褐色土と黒色土の上に堆積している。地山のロームが鮮明な褐色土であったのに対し、マウンド部のロームは礫を多く含む黄褐色土でありやや異質な印象を受けた。またマウンド部の体積も最も多く、下横部中央域に東西方向に長く伸びている。

第5号ロームマウンド

調査区東側の北壁沿いに検出された。ここは調査区の北壁をやや拡張した部分であり、加えて浅谷域の底に近いレベルであったため、調査も終わり近くになって漸く発見されたロームマウンドである。付近にはやや礫質の暗褐色土が広がっており、乾燥により黄褐色を呈していたため当初はマウンド部のロームの存在に気づかない状態であったが、削平により2つのマウンドの輪郭が明確になってきたため、第5・6号ロームマウンドとしたものである。従って、この両者についてはマウンド部がやや削り過ぎの感がある。

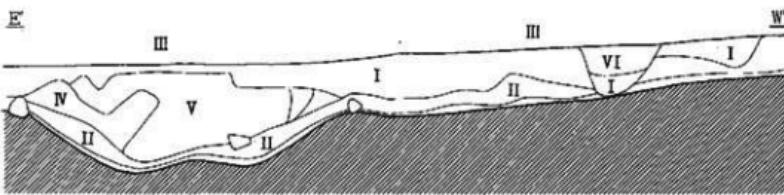
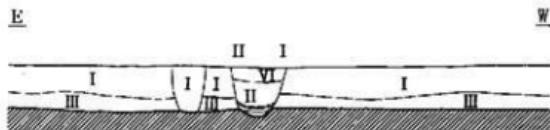
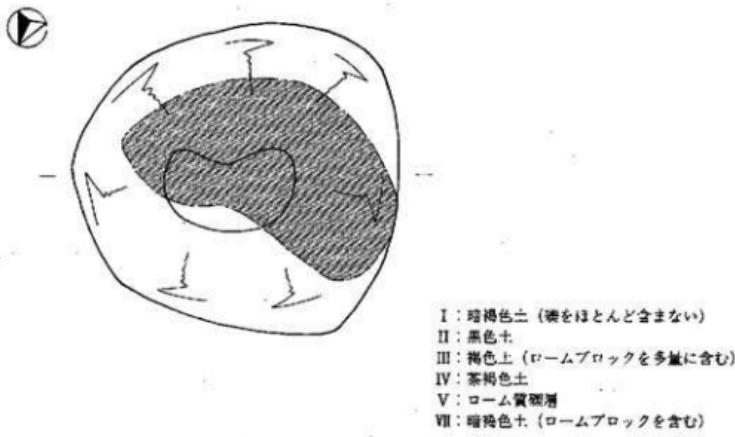
下横部のプランは350cm×230cmの楕円形を呈し、深さは70cmを測る。壁は緩やかに下降して、そのまま丸底となり、棱鉢状の断面を有する。覆土は下位から黒褐色土、暗褐色土が整然と堆積しており、径4cm前後の礫を多く含むローム質マウンドを包んでいる。マウンドは下横部の中央に位置しており、前述のように削り過ぎのためかやや厚さが少ない。なお重複する第6号ロームマウンドとの新旧関係は第III層暗褐色土の入り方からみて後者の方が新しい。

第6号ロームマウンド

調査区北壁沿いにあり、前述の第5号ロームマウンドとは重複関係で存在する。北側が調査区の北壁下へ潜ってしまうため全容は明らかにできなかった。遺構検出の過程は第5号ロームマウンドと一緒にあり、最も確認が遅れたものである。

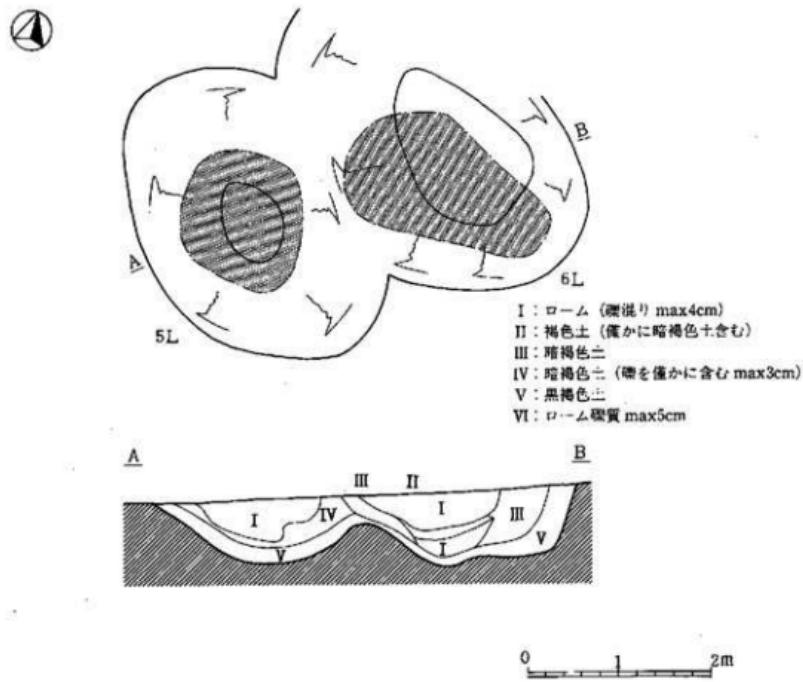
プランは確認された部分から推察して380cm×250cmの楕円形を呈し、深さ80cmと本遺跡から確認された中では最も深い。覆土は黒褐色土が最も下位にあり、その上にマウンド部を取り囲むように暗褐色土が乗る。この暗褐色土は第5号ロームマウンドのドーナツ部の暗褐色土と基本的には同様であるが、後者に比べて礫の含有量が極端に少ないと見分けがつく。マウンド部は礫質のロームであり、中間にやや暗褐色土が混じる褐色土を介在している。マウンド部は中央よりやや南側に寄っており、東西に長く伸びている。

(鳥羽嘉彦)



A horizontal number line starting at 0 and ending at $2n$. The line is divided into n equal segments by tick marks. The first segment is labeled 1. The last tick mark before $2n$ is also labeled 1, indicating the segments are of length $1/n$.

第9図 第4号ロームマウンド 5トレンチ南壁断面図



第10図 第5・6号ロームマウンド

第2表 ロームマウンド一覧表

No.	マウンド部			下 墓 部			マウンド部 長軸方向	土 層	備 考
	長軸	短軸	高さ	長軸	短軸	深さ			
1号	230	190	60	370	290	80	N-67°-E	マウンド部のロームは中央底部まで続く。黒褐色土と暗褐色土が間引く。	昭和61年、片丘山整地用地内より発掘された
2号	310	110	90	320	310	70	N-76°-W	マウンド部ローム。黒色土がマウンドを包む。マウンド内に黒褐色土の塊が入る。	1トレンチ内
3号	118	110	66	186	128	40	N-8°-E	マウンド部ローム。下位から暗褐色土、黒色土が堆積し、マウンドと黒褐色土を乗せる。	2トレンチ内
4号	300	154	94	354	326	64	N-85°-W	マウンド部ローム質軟層。下位から暗褐色土、黒褐色土の堆積があり、マウンドと黒褐色土を乗せる。	5トレンチ内
5号	160	140	44	350	230	70	N-34°-W	マウンド部ローム。下位から黒褐色土、暗褐色土が堆積しマウンドを包む。	
6号	228	132	40	380	250	80	N-87°-W	マウンド部は褐色土が介在するローム。黒褐色土がマウンドとその周囲の暗褐色土を包む。	

2) 小豎穴

27基の小豎穴が検出されたが、分布域はI地区西側の微高地部に限られる。いずれも検出面はローム面であり、黒褐色土もしくは暗褐色土を覆土としているため助縫による削平の際、明瞭な輪郭がえられ容易に検出ができた。覆土についてはこの2者が主体を占めており、おそらく形成時期の違いによるものと考えられる。

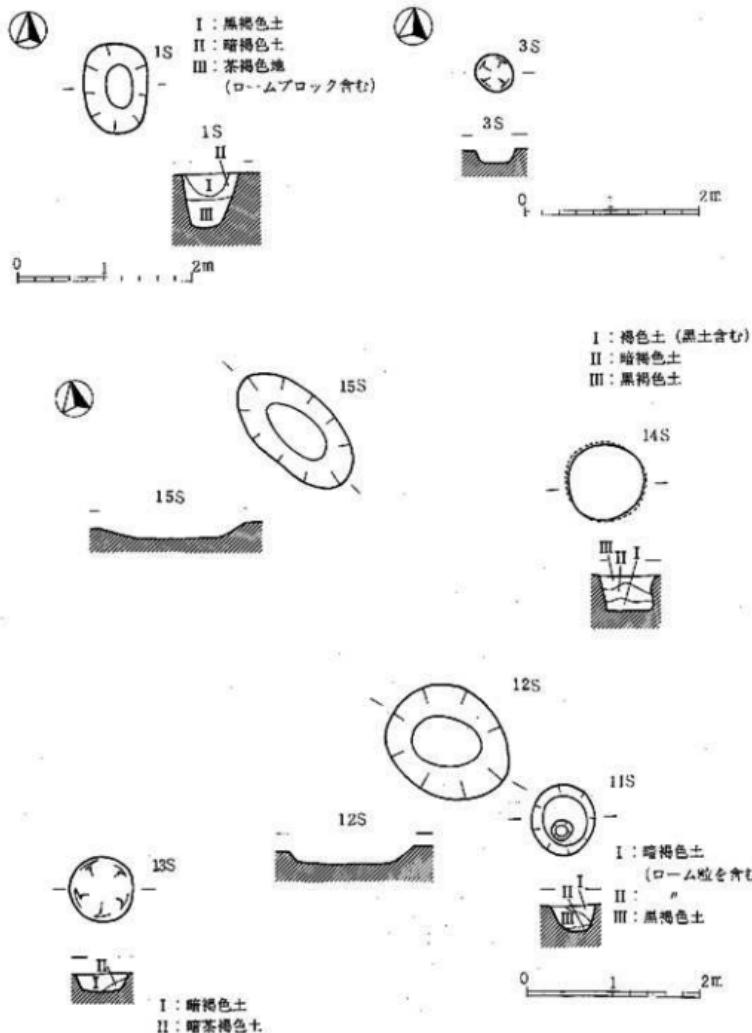
分布としては微高地部の尾根上に大半が集中しており、ほぼ直線状をなす。1S、19Sのような僅かな例を除くと後述する溝の内側にあり、何らかの関連性を伺うことも可能であろう。

形状は円形の平面形を呈し、深さ30cm前後のタライ状断面のものが最も一般的であるが、中には1S、2S、21Sのようにかなり人形で、また深いものもみられる。21Sには覆土に径15cmを計る礫が数個はいっており、産状から投入した砾の可能性が強い。

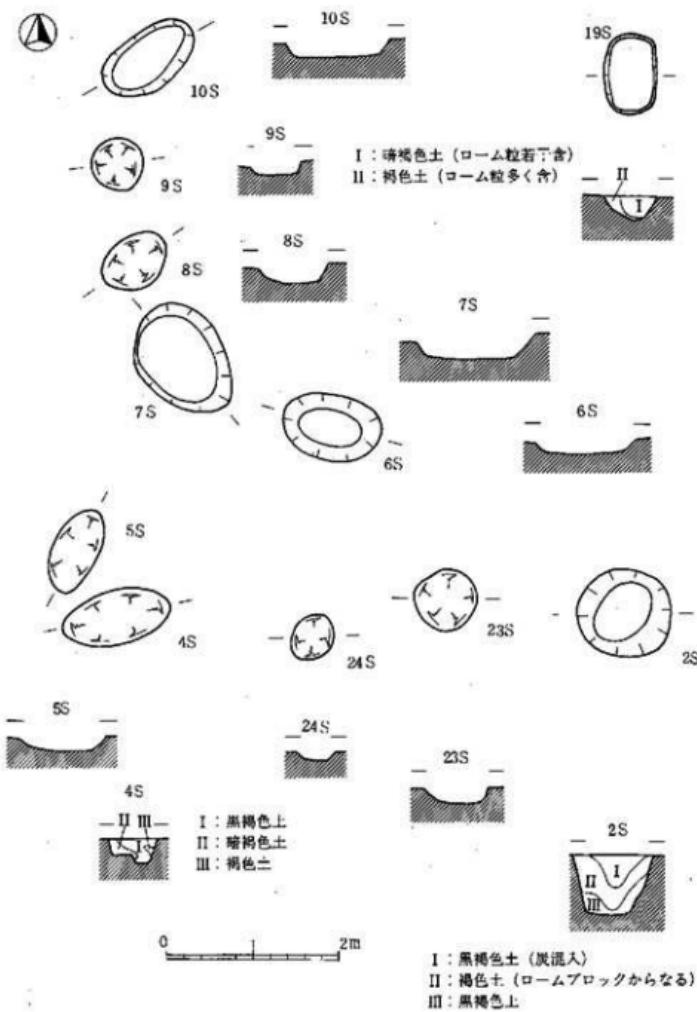
(鳥羽嘉彦)

第3表 小豎穴一覧表

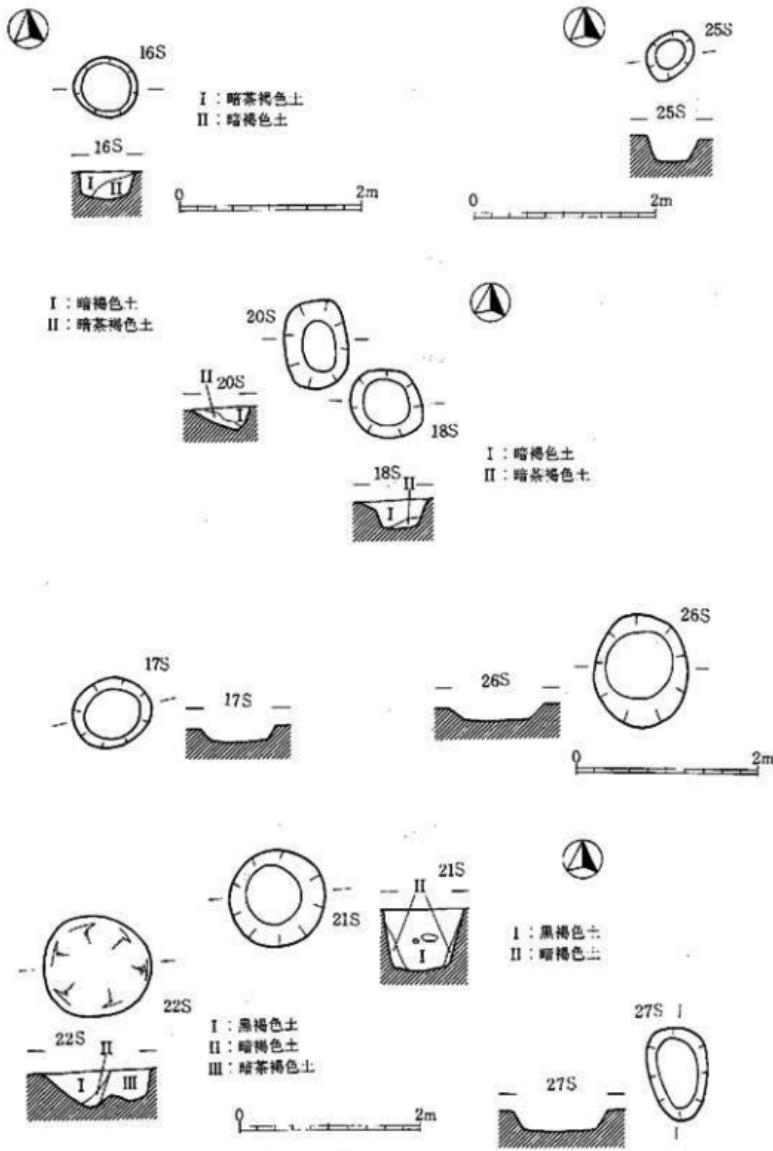
No.	確認規模	平面形	土軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	103×72	楕円	N-87°-E	コップ状	50×30	平坦	62	
2	107×108	"	N-65°-W	コップ状	78×55	"	69	
3	45×43	円	N-53°-W	たらい状	—	"	15	
4	125×62	楕円	N-78°-E	たらい状	—	二段	27	
5	100×50	"	N-28°-E	たらい状	—	平坦	16	
6	114×75	"	N-73°-W	"	72×40	"	15	
7	138×100	"	N-40°-W	"	108×76	"	27	
8	80×60	"	N-57°-E	"	—	"	20	
9	61×60	円	N-22°-W	"	—	"	14	
10	115×66	楕円	N-53°-E	"	99×47	"	18	
11	82×72	"	N-5°-W	コップ状	57×49	"(小穴1)	29	
12	147×124	"	N-60°-W	たらい状	74×58	"	22	
13	76×74	円	—	たらい状	—	"	20	
14	90×88	"	—	袋状	94×90	"	39	
15	465×86	楕円	N-47°-W	たらい状	86×40	"	18	
16	68×65	円	E-W	たらい状	53×50	"	29	
17	87×76	楕円	N-75°-E	たらい状	62×54	平坦	15	
18	77×74	"	N-88°-W	"	49×48	"	31	
19	93×60	方形	N-S	擂鉢状	83×51	丸底	26	
20	95×69	楕円	N-S	擂鉢状	55×34	"	25	
21	104×104	円	N-87°-W	コップ状	69×65	平坦	66	礫数個入る
22	116×110	"	N-87°-W	不整形	—	段々	33	
23	70×70	"	N-87°-W	たらい状	—	平坦	18	
24	52×49	楕円	N-87°-E	"	—	"	9	
25	57×53	"	N-80°-E	たらい状	35×27	"	25	
26	123×102	"	N-87°-W	たらい状	70×70	"	17	
27	100×66	"	N-4°-E	"	77×42	"	21	



第11図 小型穴群(1)



第12図 小野穴群(2)



第13图 小型大群(3)

3) 溝

I 地区の西側に存在し、ちょうど微高地と渓谷域を隔てる位置にある。調査区北西隅において端が壁下へ潜っているが、そこから東へ約18m ほど直線状に延び、渓谷域にかかる付近で急に向きを南へ代え、やはり18m 位やや西側に反りながら南下し、そこで消滅している。

幅は最も広い屈曲部のところで80cm を測るが他では約50cm と一定しており、また深さも屈曲部を除き5 cm 前後と一定している。

この溝については前述のように微高地と渓谷域を隔てる位置にあること、ほぼ直角に折り曲がっていること、幅や深さが一定していることなどから自然形成とは考えにくいところがあるが、決定的な判断材料が出ないため性格づけができなかった。

(鳥羽嘉彦)

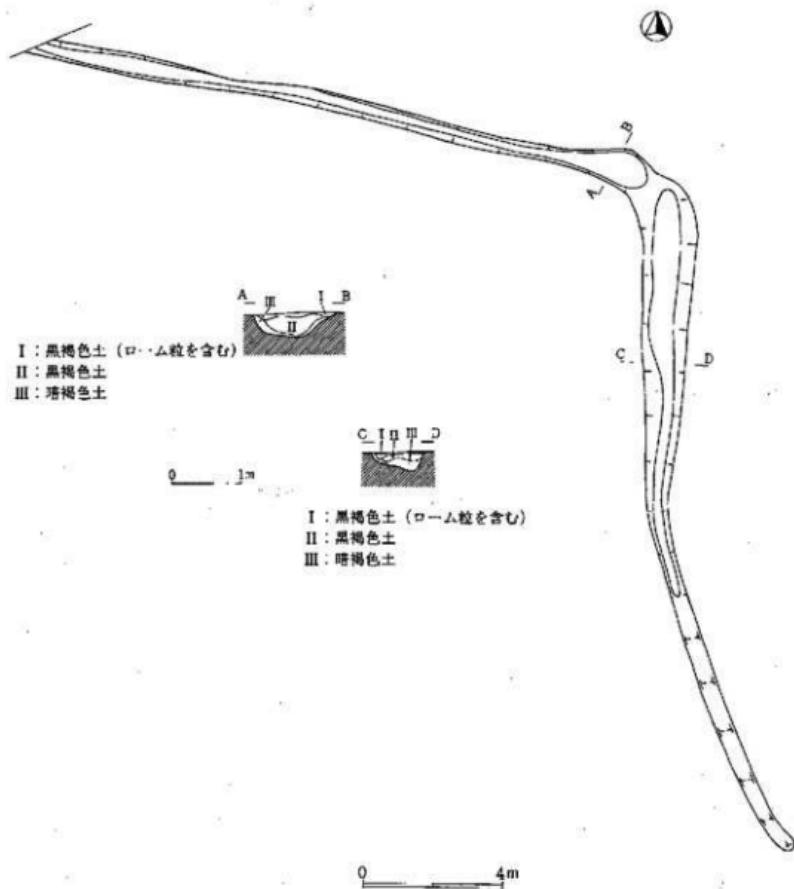
第2節 II地区

1) 北熊井城関連遺構

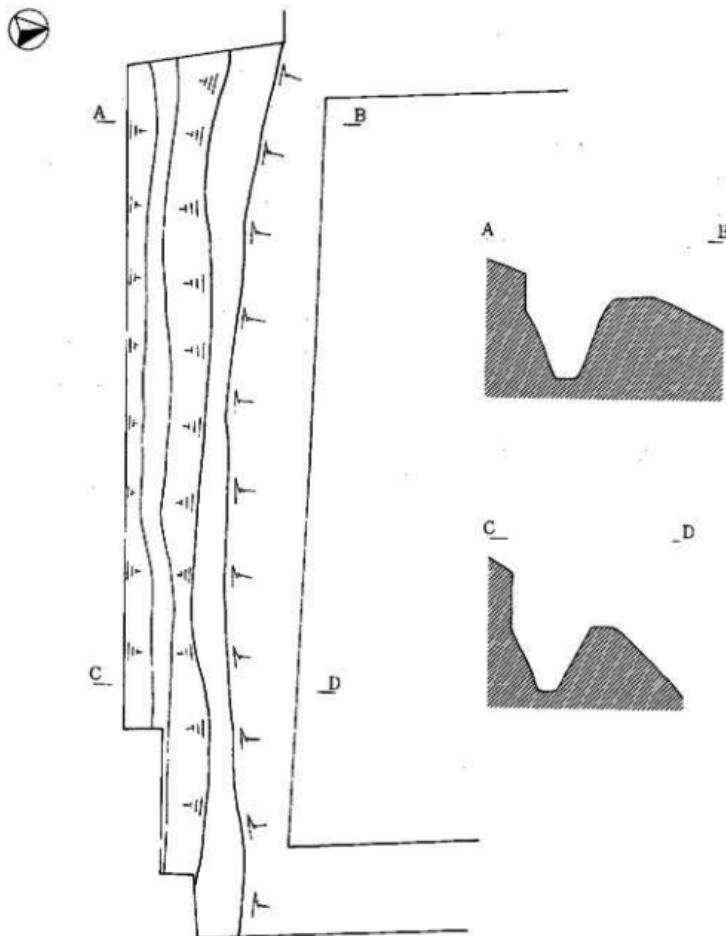
今回調査されたII地区は、竹ノ花遺跡の最北西端部にあると思われる。遺構の存在と遺物の分布調査のためA-E トレンチが設定された。この地区は、北熊井城の「東二郭」北側に位置し、特にA-C トレンチは郭北側斜面上を傾斜に沿う形で南北に設けられた。このため、トレンチ設定の当初目的以外に、北熊井城跡に関連する遺構の確認等の可能性が伺われていた。

東二郭上は、他の郭と同様に平坦になっており、畠地として利用されている。発掘調査に先立つ現地踏査で、北側斜面上部において、郭部分から1.5m ほど下がった所に巾2 m 前後の帯状平坦部が一段存在することが確認された。位置的にも、形態的にも帶郭の可能性が考えられたためトレンチにより確認することとした。調査では、A トレンチの上部平坦部分が地山ローム面に深く掘り込まれた状態となっていることが最初に確認された。このため、A トレンチからB トレンチにかけての上部平坦部分については、トレンチ拡張の形で調査を行なった。

調査の結果、この平坦部分は、斜面への削平、盛土によるものではなく、斜面を横に深く掘り込んだ溝状の遺構内に覆土が堆積した結果によるものと判明した。遺構は、調査された範囲で東西9.5m が確認された。郭上部と帯状平坦部を結ぶ比高差1.5m 程の斜面部分が調査区域外となるため、その全貌を伺いることはできなかったが、削平されて平坦な郭上部分から溝底部に向けて傾斜角65°~75° の急勾配をもって直線に掘り込まれていると思われる。その後、25~35cm の底辺部を経た後、再び同程度の傾斜で比高差70cm 前後立ち上がり、巾30~40cm の平坦部から北へ向かって斜度約26° の斜面が続いている。溝底部は、東へ向かって緩やかに立ち上がる傾斜がみられ、傾斜角約5° を計る。検出されたローム面はいずれも堅緻で、削平により築造されたものであると伺える。



第14図 溝



第15図 北熊井城関連遺構

本社の時代的属性については、遺物の伴出はみなかったものの、北熊井城址に関連するものと考えられる。検出の範囲が狭く、その性格については限定し難いが、空堀、土塁、馬出等が考えられる。空堀としては、北熊井城に看られる他の施設に比して小規模すぎることと、郭上部までわずかの距離しかないことから可能性が薄いと思われる。土塁については、結果的にその形態を呈していることから、土塁的役割は当然付されているとは思われる。しかしながら、土塁が持つべき防衛線としての役割をはたすためには、その内側、つまり溝部分の空間が行動空間としてあまりに不充分であり、また主郭にみられるように、斜面中に築く以前に郭周縁部にまず築造されているべきかと考えられる。したがって、土塁そのものを目的としてなされた施設とは考え難い。最後に、いわゆる「馬出」については、溝底部の狭隘な点からやや疑問視されるものの、馬ばかりでなく、兵の出入を主な目的とした施設としては、充分その目的にかなうものと考えられる。緩やかに西斜する底部がこれを裏付けていると考えたい。

従来、北熊井城は南西方面に備えた城とされ、南側には「るい」等大規模な施設造成がなされている。これに比して北側の、特に東一～三郭についてはほとんど手が加えられていないかのように言われて来た。こうした中での今回の発見は、その詳細については今後の調査をまたねばならぬものの、大きな成果であったと言える。

(伊東直登)

第V章 遺物

土器

本遺跡により遺構外からではあるが、縄文時代早期から弥生時代中期にかけての土器が出土した。これらの多くはI地区より出土し、当時の生活の場が台地上に立地するI地区だったことことがうかがえる。

1、2は縄文時代早期に属すると思われる土器片であり、いずれもII地区から出土した。1は隆帯と縄文、2は縦輪体圧痕文によって文様構成されている。3~12は縄文時代前期末、十三普提式に該当するものである。3は縄文を施文とし、細い粘土紐によって幾何学的に文様構成されている。4は沈線、5、6、7は押引文が認められるが、いずれも細片である。8~12はいずれも口縁部で、粘土紐によって文様構成されている。8、9は同一個体で横位と波状の粘土紐によって文様構成されている。12は斜縄文も認められる。13~22は縄文時代中期初頭に該当する。22以外は沈線によって文様構成されている。13~16は口縁部で13、14は口唇部にも沈線の施文が認められる。23、24は平出3類A系の土器片である。25、26は沈線が認められるが所属時期は判然としない。27~36は縄文が施文されている。27~33がやや粗い縄文に対し、34~36は細い縄文が施されており、36は縦位の沈線が認められる。27、28は同一個体である。

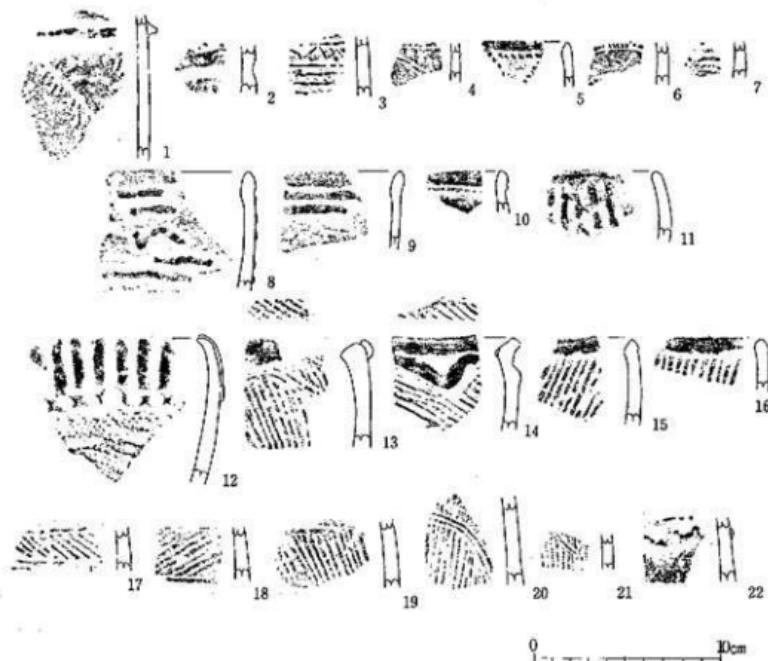
弥生時代に該当する土器は3点得られたのみである。37は壺の口縁部で口辺部外面には押圧凸帯が存在し、口唇部には沈線による施文が認められる。内面調整は条痕による。38、39は外面に条痕が認められる。

(藤原典明)

石器

I地区 I地区から出土した石器は、石鎌6、石匙2、不定形石器2、打製石斧11、横刃型石器1、磨石1の計23点である。

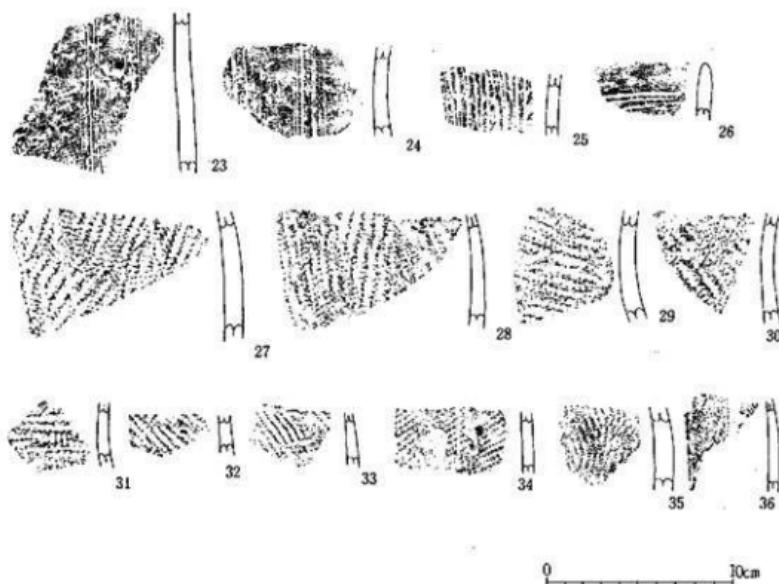
石鎌1・2は、底辺への抉り込みの浅いもの、3~5は底辺への抉りが深く、比較的大形。6は脚部を欠く。調整は丁寧である。石匙7は、柄の部分の作出がわずかに認められるだけの粗雑なもので、刃部にはほとんど加工を加えていない。8は柄が欠失しているが、縦型石匙の刃部であろう。周縁に細かな調整を施している。不定形石器9は、断面三角形の部厚い刺片を用い、その両縁を刃部として使用している。10は、2次調整を施さず、一次刺離面の鋭い縁辺を刃として用い、細かな使用痕が認められる。打製石斧11・12は、小形横円形を呈し、14も刃部を欠くが同形態をとるものであろう。13・16・17はやや刃部が幅広となる短冊形で、ともに頭部を欠いている。15は細身、薄手の短冊形。18は刃、頭部を欠くが、撥形を呈しよう。19~21は頭部破片。11点の打製石斧は、ともに作りが極めて粗雑で、破損率も高い。横刃型石器22は、一次刺片のバルブの部厚い部分に調整を加えて薄手に仕上げ、これを外弯する刃部としたもの。表面にのみ加工を施し、裏面には全く手を加えていない。磨石23は、表裏面とも良く研磨されており、かなり使いこんだ様子が観察できる。磨面は平坦である。



第16図 出土縄文上器(1)

土器観察表

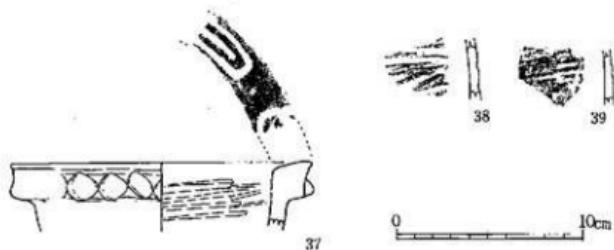
番号	出土場所	器形	器位	文様構成要素	器面質地	施土	備考
1	江戸川Eトレ	双持	軸	縦文	ナゲ	長石	
2	" "	"	"	縦文	粗	石英	
3	I地区D-3	"	"	縦角状江戸	粗	長石	
4	" F-5	"	"	縦文	ナゲ	"	
5	" "	"	口底	比縫	"	"	
6	" E-4	"	"	齊引文	粗	"	
7	" E-9	"	"	網	ナゲ	"	
8	" F-5	"	口縫	角帯	"	長石	
9	" "	"	"	"	"	"	
10	" "	"	"	"	"	"	
11	" D-8	"	"	"	"	"	
12	" F-5	"	"	縦帯横文	ナゲ	"	
13	" G-9	"	"	縦帶江戸	"	長石	
14	" C-7	"	"	"	"	"	
15	" E-5	"	"	比縫	粗	"	
16	" G-6	"	"	"	"	"	
17	" E-10	"	断	"	"	"	
18	" E-5	"	"	"	ナゲ	"	
19	" G-6	"	"	"	"	"	
20	" B-8	"	"	"	粗	"	
21	" D-4	"	"	"	ナゲ	長石	
22	" F-5	"	"	縦帶横文	"	"	



第17図 出土縄文土器(2)

土器観察表

番号	出土地点	器形	部位	文様構成要素	器表調査	胎土	備考
23	II地区A-トレ	深鉢	側	米粒	ナゲ	長石	
24	*	*	*	*	規	*	
25	I地区E-9	*	*	米粒	ナゲ	長石、石英	
26	II地区A-トレ	*	口縁	*	規	長石	
27	I地区A-5	*	腹	縄文	ナゲ	*	
28	*	*	*	*	*	*	
29	*	D-8	*	*	*	*	
30	*	E-9	*	*	*	*	
31	*	F-5	*	*	*	*	
32	*	D-9	*	*	*	*	
33	*	C-8	*	*	*	*	
34	II地区C-トレ	*	*	幾何縄文	ナゲ	長石	
35	*	*	*	*	*	*	
36	I地区H-11	*	*	縄文水波	規	*	



第18図 出土弥生土器

土器 観察表

番号	出土地点	器形	部性	文様模様	表面調査	施土	備考
37	I地区A-4	直	口縁	口唇にレンズ状の押圧	朱色	赤石、石灰	
38	" B-2	變	網	条痕	ナゲ	灰石	
39	" D-8	フ	*	*	*	*	

II地区 II地区からは、石鎌1、石匙2、不定形石器1、打製石斧5、特殊磨石1の計10点の石器が出土した。

石鎌24は、底辺への抉り込みの浅い三角形鎌で、1に類似する。石匙25は、模型の完形品。調整は粗雑で、表面に原石面を残す。26は、つまみ作出のためわずかな加工を施し、刃部も簡単な調整を行っている。つまみの意図的作出からみて、不定形石器というより石匙に分類されるであろう。不定形石器27は、右辺に刃部を作り出している。打製石斧33は、小形の橢円形を呈し、11・12に類似する。28は、撥形の欠損品。部厚い三角形状を呈す。30は、周縁に簡単な加工を行っただけの粗雑品。29は、部厚く、重量感にあふれている。32は、一次剝片の表面縁辺にのみ調整を施したもので、打製石斧かどうか疑問も残る。特殊磨石34は、半欠品で、2面に幅3cmほどの研磨面をもつ。先端には打痕が観察される。

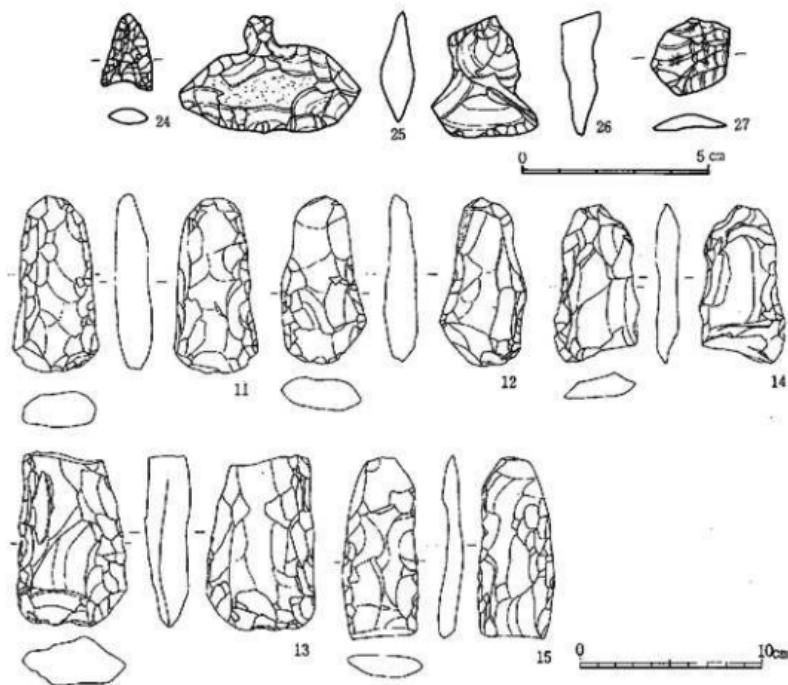
I、II地区的出土石器を通じていえることは、調整が極めて難であり、形態的に整わないものが目立つ。特にII地区的打製石斧は、定形的なものは全くなく、繩文中期に伴出するような整ったものは見当らない。本遺跡の特徴といえるかもしれない。

(小林康男)

近世の遺物

I地区からのみ18世紀末から19世紀に主體を置く遺物が少量出土した。完形品ではなく、全形を推定し得る大形破片もない。灰釉碗、灯明皿、拳骨茶碗、鉢の種類がある。大半は瀬戸・美濃系である。I・II地区とも中世にさかのばる遺物の出土はなく、城跡に関連する出土資料は得られなかった。

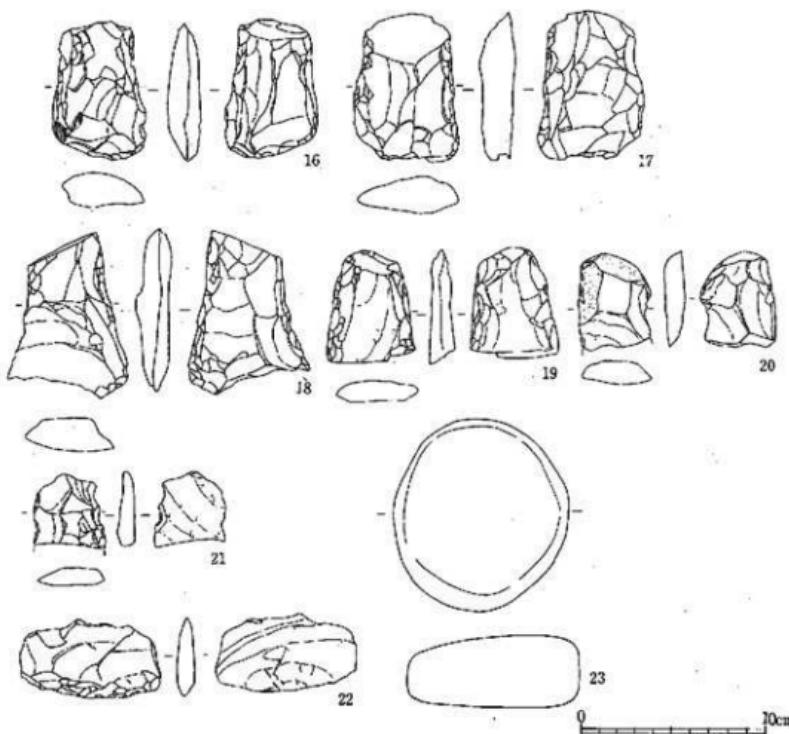
(小林康男)



第19図 I 地区出土石器(1)

石 器 觀 察 表

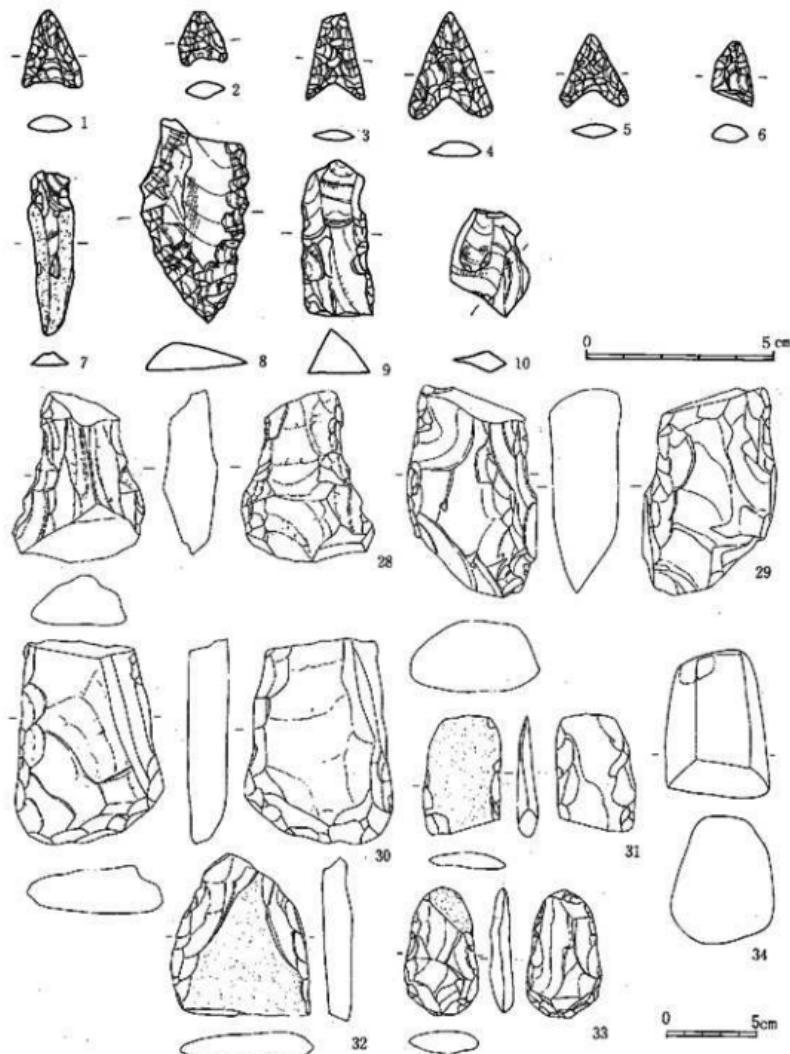
番号	遺 留	種 别	石 器	長さ (cm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 徴
1	E-16	石 鏁	手鋸→	1.8	1.3	0.5	1.2	
2	B-8	"	黑曜石	1.2	1.2	0.4	0.4	
3	G-10	"	"	1.9	1.5	0.3	0.8	
4	A-10	"	"	2.5	1.7	0.4	1.5	
5	D-9	"	"	2.0	1.4	0.4	0.7	
6	E-3	"	"	1.5	1.0	0.4	0.5	
7	G-10	石 鏁	"	4.5	1.0	0.4	1.9	
8	F-5	"	"	5.0	2.9	1.3	11.2	
9	F-6	不定形石器	"	4.1	1.7	0.7	8.5	
10	F-6	"	"	2.6	2.1	0.5	2.0	
11	F-5	打製石斧	真 鋒	24.5	4.0	1.8	90	
12	G-10	"	"	16.1	4.4	1.5	76	
13	B-10	"	粗粒砂岩	16.2	5.7	2.5	155	
14	B-10	"	真 鋒	7.6	3.4	1.2	44	
15	F-11	"	"	9.5	4.0	1.2	49	



第20図 I 地区出土石器(2)

石 器 鏡 索 表

番号	遺 墓	地 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重 量 (g)	特 徹
16	F-5	頁岩	74	50	18	78	
17	G-8	*	77	54	19	95	
18	F-5	*	68	49	18	83	
19	D-18	*	55	58	14	38	
20	H-12	*	49	38	12	22	
21	E-19	*	37	36	9	12	
22	G-5	霞刀型石器 磨 石	65	75	9	12	
23		都柱型灰岩 大山型灰岩	103	55	56	540	



第21図 II地区出土石器

石器観察表

番号	遺 墓	種 別	石 片	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (-mm)	重 量 (g)	特 徴
24	II-D	石 銛	チート	18	9	4	1.2	
25	2 C	石 銛	*	31	28	5	10	
26	II-D	*	*	23	27	10	7	
27	II-E	不定形石器	玉緑石	25	21	3	1.5	
28	Aトレ	*	*	86	69	26	149	
29	II-A	*	灰 石	106	77	38	350	
30	II-A	*	片 岩	109	79	24	288	
31	II-F	*	*	62	41	11	37	
32	II-Cトレ	*	頁 石	72	73	15	100	
33	Cトレ	打製石片	*	66	40	12	33	
34	II-F	特殊磨石	粗粒砂岩	79	55	56	300	

第VI章 北熊城跡について

「信濃 第二卷第一号」(1933)に、栗岩英治氏の臨地研究として以下の下りがみられる。

「学校を解して、又一つの驚くべき史跡に出喰はせた。それは、熊井に於て、一つの大きな平城を発見した事であった。規模は餘程大きいもので、基壇の廣さ、深さ、及地緒の大きさからすると、きっと高遠城位はあると思った。こんな大きな遺物は初めてであるが、之に比して、史料は何もなく、唯だ地方の傳説として、仁科五郎盛信の居つた城だといつて居るだけの貧弱である。信府統記、基地にも、一つも見えて居ない點から、或は未完成でもあったろうか、それにしても、あれだけの大きな城が、其名も留めないと、摩訶不可思議の事である。」

北熊井城は、中世の城跡として県内でも有数の規模を持ち、地元片丘北熊井では「城」の地名をもって親しまれている。しかしながら、その規模に比して歴史的経緯の解明はあまり進められていない事は、前載文中にみられるとおりである。ただし、明治以来在地研究者を中心に数々の研究が積み重ねられて来ていることもまた事実である。これら諸研究の現時点での集成として、小松克己氏による「塙尻市話」(1985)、「片丘村誌」(1985)等が掲げられるが、ここでは「塙尻市話」中の「北熊井城について」を転載しておきたい。

「北熊井の町村と中島部落の間に『城』と呼ばれている古城跡がある。段丘のように西に突き出た高い台地を深い空堀によって六つの郭に区切つてある大きな平山城である。この城跡の保存のために地主の御了解を得て、先年(昭和50年)区の関係者のお骨折りで、当余本の桜の苗木が植えられた。史跡愛護のためにもご同慶に耐えない。そこでこの機会にこの城について少しのべてみたい。」

一 城はいつつくられたか

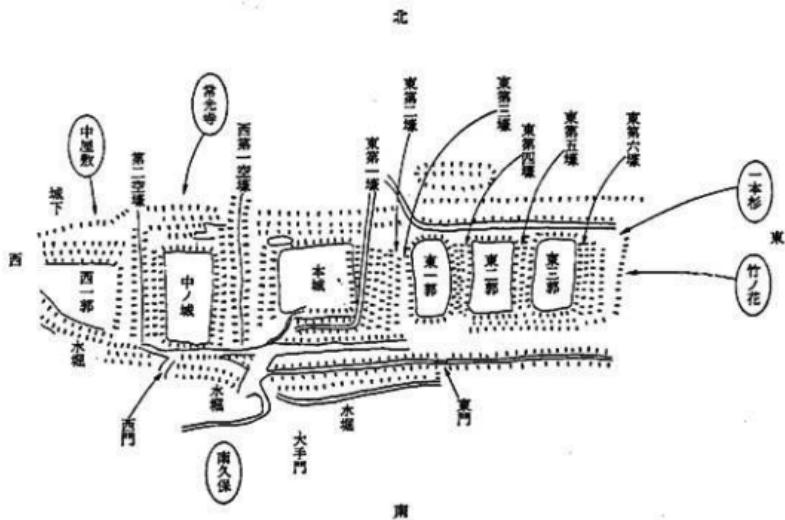
塙尻市の郷土史家故堀内千万蔵翁の名著「信濃歴史時代史」には伊那189、諏訪32、木曾24、東筑摩89、安曇111、佐久118、小県85、史蹟40、地図23、高井64、水内95、計639の城館跡が記録されている。その後東筑摩郡誌編纂会での調査によると、東筑摩郡内だけでも200以上もあることがわかった。しかし築城年代や城主の判明するものは極めて少くない。北熊井城も築城年代や城主についての確かな記録はないが、安筑城地方全体の城について概略的にいえることは、当地方の山城の一部のものは鎌倉時代ごろすでに土豪によってつくられたということ。南北朝時代に小笠原氏が守護として府中(松本)に入るとその支配下に入り、北信や東信へのおさえとして北に備えられ、戦国末期に甲斐の武田氏におびやかされるようになるとさらに多くの城ができて小笠原氏の守りとして南に備えられ、武田に占領されてからは北の村上氏や北陸の上杉勢に備えられたであろうことは想像にかたくない。従って城もその時期によっていろいろ手を加えられていることとも考えてみる必要がある。

紀元646年の大化改新によって律令制がしかれ公地公民になってからは私有地をもつ豪族はなかったから、城の必要もなかったが、東北地方平定の前線基地には越後の淳足郡、出羽の磐舟郡

など設けられたが城といわす櫛といった。奈良、平安初期ごろは筑摩郡に六郷ありこの辺は良田郷に属していた。平安中期から律令制がくずれた各地に莊園という私有地ができ、文治2年(1183)にはじめて熊井郷の名が現れる。熊井は諫訪下社領でさらに木所八条院の莊園、内田は南区内、北内の牧でともに朝廷の左馬寮に所属する牧場であった。郷や牧の役人の名の居所もわからない。

鎌倉時代にはいると頼朝の御家人が年貢の徵集権を与えられて地頭として各地に土着し、承久の乱(1221)以後は塙尻氏、赤木氏、白川氏、村井氏などの地頭がそれぞれの郷名を名乗っていた。元寇以後南北朝時代にかけて幕府の統制がゆるむと、武士間での土地の争奪がはげしくなり、ために彼等は自衛と示威のために堀や土居をつくって館を構え一族郎党をも住ませた。堀に囲まれた所を堀ノ内とか堀内とよび全体の構えを小屋といった。村井氏の小屋は方500mにも及ぶ広大なもので今も町名に残り、塙尻氏のもの大小屋、堀ノ内などの部落名となっている。さらに室町時代も応仁の乱(1467)以後戦国期に入ると戦いは激しくなり、武将は山城を構えてたてこもるようになった。しかし、山城は平素住むには適さぬので城の前面に館を構えて生み、さらにその前面に侍町をつくって家臣を住ませた。平素も山城には監視人を置いて警戒させ敵襲に際してはのろしをあげて連絡した。しかし敵に包囲されれば不利があるので、城の奥にさらに「詰めの城」を設けて家族をかくまい危い場合はそこから他領へ逃げられるようにした。独立した城でもいた。戦国期頃は城を「じょう」と呼んでいた。

二 北熊井城の構造



第22図 北熊井城概念図 (『片丘村誌』より転載)

1 主部

熊井の城のような平山城は新しいという見方もあるが、本郭の後の土居が古いなど古い様式も備えている。また規模の大きいことでも県下で有数である。

(1) 本城

主郭であり最も大きく南北80m、東西90mもあり、東側には高さ20m以上もある高い土居を設け、その東には空塹を三重に掘ってある。西側には塹は1つであるが、現在でも深さは20m以上もあり、底巾も広くなっている。いずれからもたやすく攻めこめぬようにしてある。

(2) その他の郭

本郭の西に西一、西二の郭、本郭の東に東一、東二、東三と計6つの郭があり、それぞれの間には空塹があって独立している。東三郭の東を「竹ノ花」というのは「館の鼻先」の意でこの城が東方を強く意識していることを思わせられる。

(3) るい

城の南側には土居を持ってるいを築き、人馬の繰出しを敵に見えぬようにしてある。るいの中間に門らしい所が二ヶ所ある。北側は絶壁のように切立った要害でるいはない。南と西に備えた城である。

(4) 水の手

城の南側と北側に自然流と思われる小川があるが、わざわざ流れをまわして来たあとがみられる。空塹をせき止めて水堀にすることも可能と思われる。本郭の東に金池と呼ぶ湧水池がある。

(5) 城主の館と侍町

城主の館跡ははっきりしないが、城と町村部落の間で大東と呼ばれる小松勇人氏宅の付近であろう。ここには城主の墓と思われる古い五重塔二基と宝篋印塔の一部が現存している。

家臣団の住んだ侍町はあきらかに町村であり、町割りもきちんと出来ている。侍町には「タツマチ」と「ヨコマチ」がある。「横町」の地名はいまも残っている。家臣は町村のほかにも中島、中里敷、堀田など周辺にも住み平素は食糧生産をしていたであろう。

(6) その他城に關係あるもの

城の東北鬼門の方向にあたる一本杉の地に寺を建ててあった。常光寺の前身で薬師堂もあり、城主の祈願寺ないしは菩提寺であったと思われる。「山寺」という古いことばが沢名となって残っている。城の裏鬼門南西の方向、いまの町村大沢公金所の所に日枝神社・山王権現社を祀ってあった。城主の氏神様であろう。この社殿は現在諏訪社境内に蚕玉様の社殿となっているが、出来が良いと藤島亥治郎博士もほめておられた。

中島の公会所付近に貯蔵庫らしい穴がいくつか発見されている。町村の良原は馬場であり、中島の松葉は的場、竹の花は鉢のはな、その他城下、前田、中里敷、奥里敷、山王、南久保、北久保など城に關係ありそうな地名も多い。

(7) 語の城はどこか。

これだけの城であるから前記のように奥の院ともいべき語がなくてはならないと一志茂雄博

士もいわれている。詰の城はいざというときの拠点でいわば本城である。2~3里位奥にある場合すらある。小笠原氏の本拠は山辺の林の城であるが要害ではなく床飾りのような城、本城をさがしたところ中山の埴原の城であることが先年判明し、林城と埴原城が小笠原城跡としてとりえず県の史蹟に指定された。塙尻西条・熊井・村井・深志・鐵ヶ崎・桐原等の城はその前線をかためる小笠原氏の一連の城であるとの解釈のうえに立ってのことである。

熊井城の詰の城はどこか、こまかく実地踏査をしてみる必要があるがわたくしはその場所を庫裏平の北、姥ヶ沢を隔てた北の尾根の高台にある「本城」と名づけている所ではないかと思う。そこは地形、位置からもふさわしいし、その南西にある乙女崖は本来、人遠見のとおみて、「おおとうみ」は監視哨のことでありここに「ねずみ」(不寝番)を置いて敵を監視し、ここでのろしをあげれば村井や井川の城へ知らせることができた。その西に小屋久保、小屋畠があるが小屋は前記のとおり城のことである。某家の記録に合戦の虜奸姦した婦人が小屋窓へ身をひそめ、そこで生まれた女の子に「おこや」と名づけたとあるが、その間の事情を物語っているように思われてならない。北熊井城を指定史蹟にするためにもこの詰の城をさがさなくてはならない。大小屋とか本城とか「おでんじょう」とか名のつく、尾根の高い平のところで、郭や石垣など手を加えたところがあったら教えていただきたいものである。後にのべるようにとにかくそこへ武田信玄の軍が攻めてきて、それがもとで埴原城も林城も落ちたわけです。埴原城も地元の百姓、小松岡氏の努力で発見され史蹟にもなったわけで、この熊井の詰の城をぜひあきらかにしたい。

二 北熊井城と合戦

前記のように鎌倉時代になるとたしかな記録の中に村井・赤木・白川・塙尻・三村氏などの地頭名が出てくる。内田は室町時代には埴原の牧から出た波多腰氏が牛伏寺の仏像などを修理しているので関係あるし、南内田は和田筑前守雅基(和田に住む)中内田は埴原から村井へ出た村井政知(村井住)の記録があるが、本居はそれぞれ()のとおりであるから内田に館を構えたかどうかはっきりしない。ただ大宮八幡の南に「館」というところであり宮北の立小路の部落は侍町であるように思われる。

熊井の場合は平安初期からずっと源訪下社領であったので、源訪社もそんな関係で勧請されたと思う。南北朝時代の嘉慶元年(1387)7月に伊那の田切で源訪氏と小笠原氏が戦い源訪氏(上社)が勝ち、同年9月26日にまた府中熊井原で筒軍の合戦があり、こんどは小笠原が大勝したとある。熊井原は今の犬ツ原のことであるが、この時熊井城(南熊井城を含めて)があつて使ったかどうかはわからない。文安6年(1449)には源訪上社と同社と小笠原連合軍が源訪と塙尻で戦い、下社は大敗して社殿まで焼かれた。しかし宝徳3年(1451)小笠原持長は信濃守護として下社に熊井郷南北ほか伊那・小県・安曇・高井郡内の十ヶ郷を寄進している。なお熊井は下社、内田は上社の造に何回か奉仕している。このころは熊井は南北、中挟等それぞれ独立している。また北熊井の城をこの頃造ったとしてもそれは下社単独の力では無く南北朝以来上社と仲の悪い小笠原氏が肩入れして上社対策としてつくったものであろう。

熊井の城が今日みるようだがかりにつくられたのは前記のように武田晴信（信玄）が諏訪氏を破って府中をおびやかすようになってからであろう。このころの様子を最も正しく伝える記録は武田晴信の參謀の一人として実戦に参加した高白斎という人の書いた「高白斎記」という口記体の記録である。それによると晴信は天文14年（1545）6月13日に伊那の箕輪から塙尻へ入りこちらの様子を見に入つて来た。桔梗ヶ原に陣をとり「14日熊野井ノ城自落、15日小笠原館放火、16日御陣」であるが、この「」の部分後の書込みで間違いで実際は松本平へ攻め込むため様子を見に来ただけというのが正しいようである。そしてこのあと反小笠原勢力へ裏面懐柔工作をしたものと思われる。果せるかな三年後の天文17年7月19日武川、小笠原軍の人決戦が塙尻から勝弦辻にかけておこなわれた。この戦いで小笠原軍は洗馬の三村、山近、安久の西牧氏などが寝返りを打ったので、多人の戦死者を出して大敗ってしまった。長時はかろうじて林城へ逃げ帰った。柿沢の長井坂には戦死者の首塚、胴塚がある。武田勢は村井に進み、さらに林城にせまつたが佐久方面で村上氏が動き出したので村井に兵をとどめて25日に一旦諏訪へ引きあげた。記録にはないがこの間に小笠原氏の要害城もいくつか落されたにちがいない。10月には村井城の鍛立てをおこない武田流の苦請が加えられた。また塙原の仙石氏など小笠原氏の臣下の懐柔をも試みている。天文18年には武田氏は佐久の経営に力をそいだが、府中にも小笠原氏を亡ぼす晴信の手がせまっていた。晴信の府中侵略の目的は、東信の村上義清をうつために、府中から麻績を経て後方から義清の拠点地をつくためと伊豆（安曇郡）を所領に加え糸魚川に通じ、長尾氏（上杉氏）の後方を断つためである。天文19年7月3日、甲斐府中を発った武田晴信は、10日には前述基地である村井城へ着いた。「高白斎記」によると：「日星形様（時信）村井へ御着城、十三日、孫五郎未始テ出陣、西刻崩井（熊井か）へ着、十五日、御陣場ヘスグニ参ル、西刻イヌイ（城ヲ攻取リ、勝闘御執行、戌刻村井ノ城ヘ被納御馬候。子ノ刻大城、深志、岡田、桐原、山家王ケ所ノ城自落、島立、浅間降歩、仁科道外出仕（中略）十九日辛亥探志ノ城高白斎立、同戌刻五具、星形様深志ヘ御立、廿三日急普請。」これによると晴信はまず10日村井へ着城し、13日酉刻（午後6時）に熊井を占領している。熊井は小笠原の前面のかためとして非常に重要な城である。一本杉の常光寺あたりまで火をかけられたのか焼石などが発見される。15日には「御陣場ヘスグニ参ル」とある御陣場はおそらく熊井城の本城跡のことであろう。さらに同日「イヌイノ城ヲ攻取リ勝闘」とある。勝闘であるから相当重要な城のはずで熊井本城の西南になる。塙原城説と井川城説があるが、その落城によって村井の本城はじめ探志・岡田・桐原・山家など林本城をとりまいっている重要な小笠原の支城が自落している。9日に深志城の鍛立てが行われ晴信は村井から前線基地を深志に移し、23日に急普請を行ない、城代に馬場民部信春と日向大和差吉を任命しこれを守らせた。天文21年6月8日武田氏は兵站基地固めのため熊井城の鍛立てを行った。（高白斎記）つまり甲州流に改造したのである。そして安曇・筑北方面で翌22年まで戦いが行われたが、小笠原長時は故郷を捨てて京都へ亡命し、晴信は川中島へと逃出していったのである。

四 城主について

熊井城は小笠原氏の大本城であったので有力者を置いたと思われる。「雨宝山出来記」には

奥・赤沢・溝口・後藤・大和・三村・西牧・日岐氏等交替するとあり、別な記録には大和・里見氏あり、また猪ノ井軍兵衛の伝承などもあるが、根拠が明白でないので今後の研究にまたねばならない。また築城や兵站協力のため当地方の住民への影響、合戦による犠牲等幾多の問題があるが、史料を欠くので想像の域を出ない。」

(伊東直登)

第VII章 結語

竹ノ花遺跡は、北熊井城跡の東に隣接して存在する遺跡で、既に昭和61年その一部が東山山麓地区農道整備事業に伴って発掘調査が実施されており、今回の調査は2回目の調査となっている。昭和61年度は遺跡の南側地区を、そして今回は遺跡の北側地区を主体として実施された。両年度調査区内からは既に報告がなされたように幾つかの注目すべき成果が得られている。

竹ノ花遺跡は、縄文早期から中世にまでわたる遺跡である。縄文時代で特に注目されるのは、前期黒浜期の住居址が検出された点であろう。近隣では、勇屋敷、田川端で類例が得られている程度で、前期住居の様相を考えるうえで貴重なものとなろう。縄文中期初頭の遺物も、北原、女夫山ノ神で知られているだけであることから少量であるとはいいうもの的重要である。石器群は、打製石斧を主体とするものであるが、その形態は不定形で、しっかりした短冊形を呈する中期のものは趣を異にしている。縄文前期・中期初頭には今だ定形的な打製石斧が発達しないことから、この時期の在り方を良く示していよう。

弥生中期初頭の壺片はたった1片の出土であったが、弥生文化の発展を考えるうえで重視される。近年、弥生中期初頭の資料がこの片丘地区で急増しており、文化波及期の状況を把握する基礎的資料となろう。

今回の調査では、城跡東二郭の北側斜面に調査区を設けた。城跡本体への発掘は最初のことと思われるが、調査結果は、V字状の溝が遺存状態良好に検出された。城跡の遺構の一部と考えられるが、調査が部分的であったためその性格を明確にできなかった点は残念であった。この遺構の遺存が良好であったことから、北熊井城跡はほとんど破壊されることなく完全な状態で保存されていることが知られる。早い時期に、発掘調査を含む全体的な調査が切に望まれる。

以上のような成果をあげた両遺跡の発掘調査が事故もなく無事終了できたことは、地元役員の方々、地区民、調査参加者等多くの方々の御援助の賜です。厚く感謝申し上げます。

(小林康男)

図 版



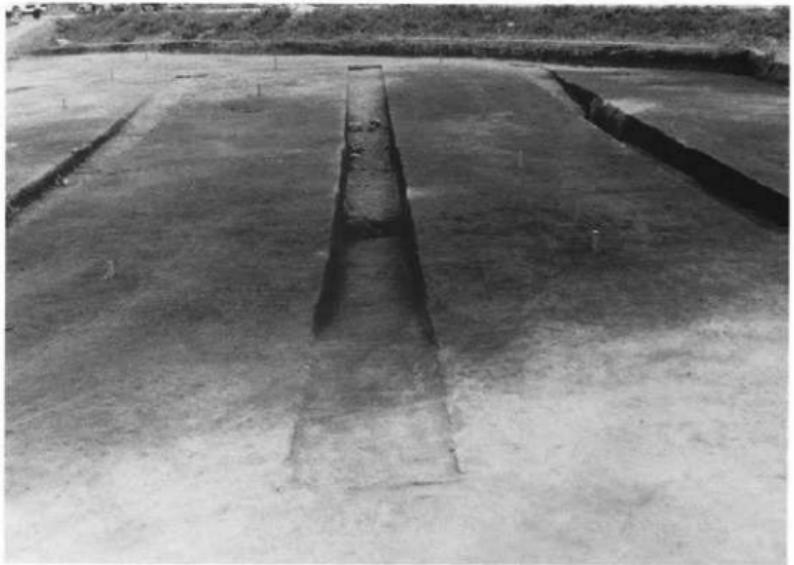
I 地区 発掘前



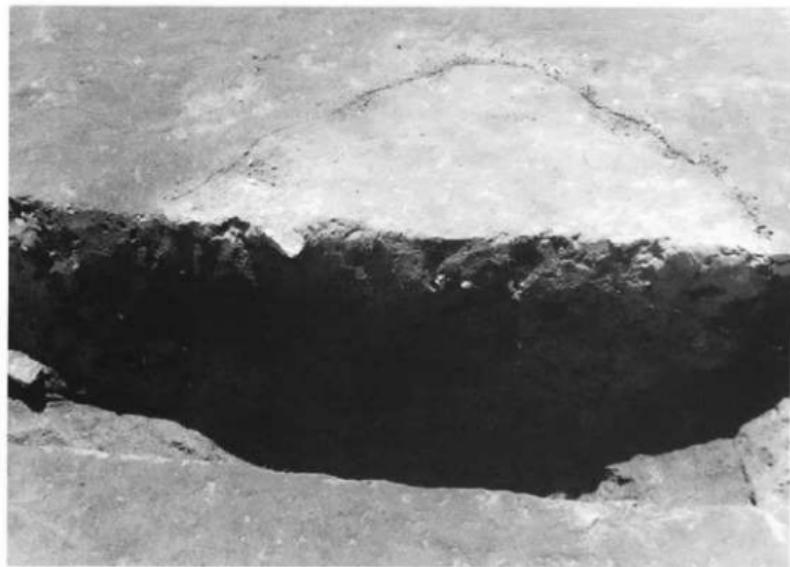
I 地区 表土除去



I 地区 トレンチ掘り下げ



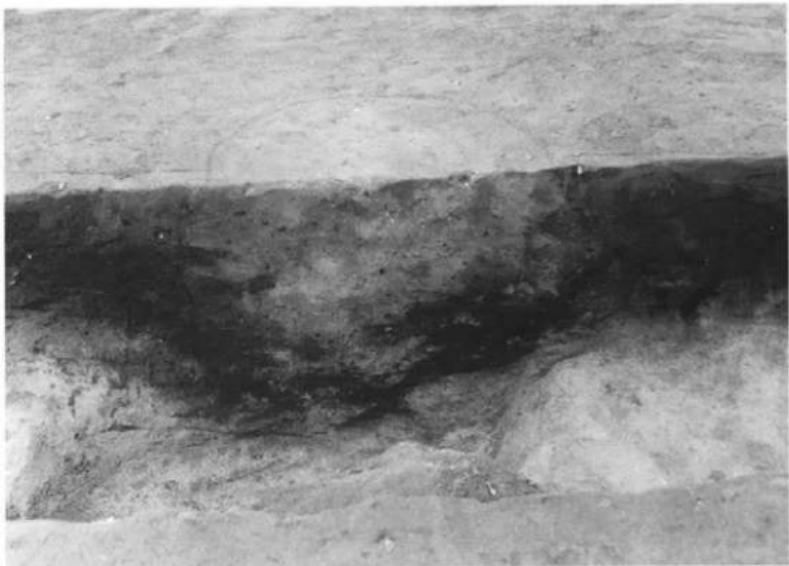
1~3 トレンチ



第2号ロームマウンド断面



第2号ロームマウンド完掘



第3号ロームマウンド断面



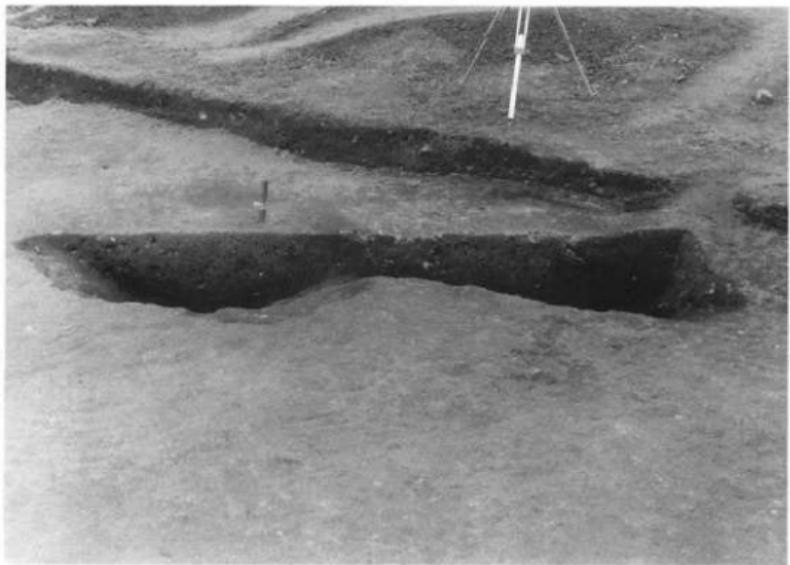
第3号ロームマウンド完掘



第4号ロームマウンド断面



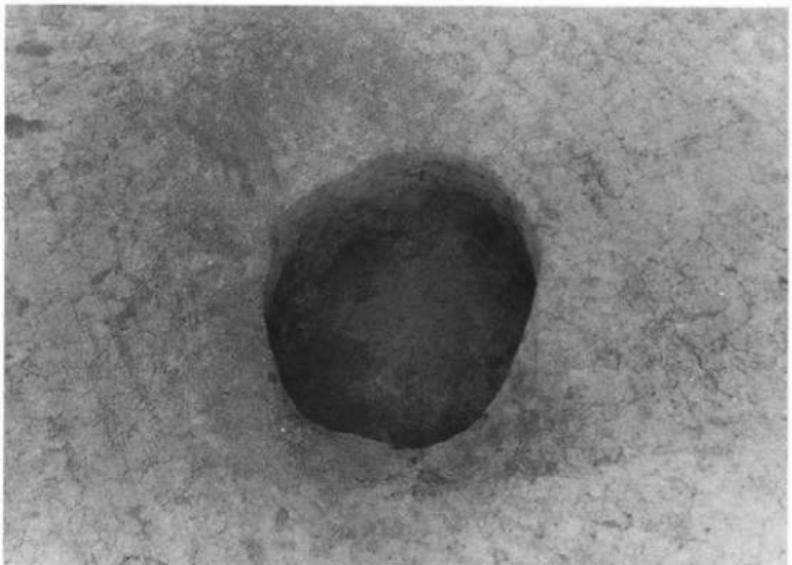
第4号ロームマウンド完掘



第5・6号ロームマウンド断面



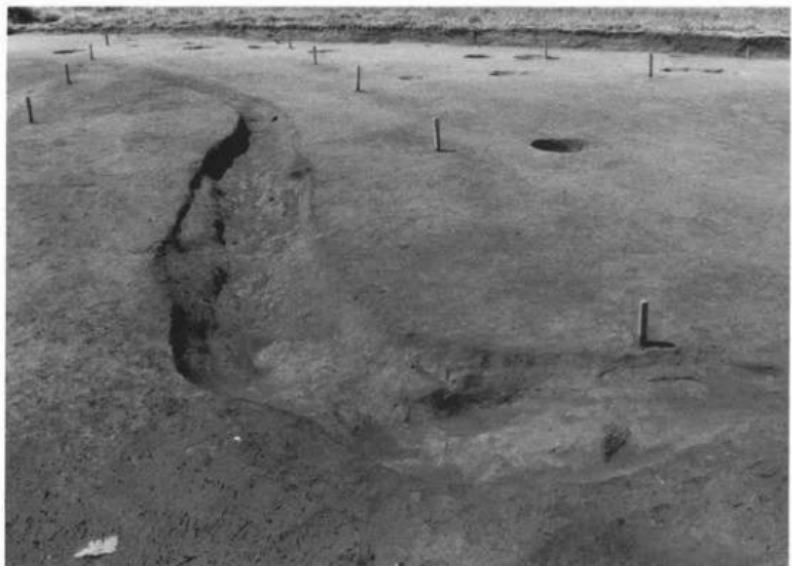
第2号小竪穴



第14号小竖穴



第21号小竖穴



溝（北側より）



溝（南側より）



小竖穴群



I 地区 全景



II 地区 全景



北熊井城関連遺構



A トレンチ掘り下げ



D・E トレンチ掘り下げ

竹ノ花遺跡

塙尻市北熊井南地区土地改良事業共同施行発掘調査報告書

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月22日 発行

発行 塙尻市教育委員会

